水面の上の（下）

犬心

◆

「ミツキン、寝るなー!!　寝たらチューするぞ!!」
「すんじゃねぇ！」
ペチン！　と、まるで芸人のツッコミのように綺麗な音で空閑さんの頭をはたくリョウちゃん。
相変わらず良いボケ&ツッコミのコンビだ。
私は、あはは、と保健室のベッドで、仰向けのまま笑う。
それはそうと、この状況はなんなのだろうか？
「美月ー、ホントに大丈夫？」
「あの……美月さん……大丈夫ですか？」
ミッチーに千恵ちゃん。
「あなたも大事な戦力なんだから、こんなとこで倒れないでよね」
「そうだぞ、ミツキン。やはりここは気付(きつ)けのチューを」
「するなっつーの！」
朱莉に空閑さんにリョウちゃん。

「ま、あんだけ全力で走りまわってれば倒れもするわよね」
「そうそう。今日はもう無理しないで休んでなー」
「どうせ午後の授業は退屈な世界史だしねー」
「だねー」
実はクラスメイトの女子全員が、この狭い保健室に犇(ひし)めき合っていたりする。
「ったく、私はそんな重病人じゃないって。ちょっと疲れがたまってるだけだからさ」
私はみんなに笑いかけながら言う。
「ほらほら、早く教室戻って。退屈な授業だろうと何だろうとちゃんと受けないと。学生の本分は勉強なんだからね。学生の本分は決して球技大会のバスケじゃない。だから、私はバスケのために寝るのさっ」
言って、私はガバッと掛け布団を頭までかぶった。
「美月ー。言ってることが無茶苦茶だぞー」
「学生の本分が勉強かバスケかバイトか恋かという問題は、フェルマーの最終定理が証明されてしまった今、人類が保有している最も難しい問題だが、それが何であったとしても、ミツキンの言うとおり、ここはゆっくり休むのがベストだろうな」
そんな空閑さんの台詞になぜか全員が納得した様子で、みんな口々に「お大事にー」と

か言いながら、保健室から出て行った。
――まったく。まったく。まったくもう。
私は、布団の中でそんな言葉を頭の中で永遠繰り返しながら、目の下を手の甲で拭(ぬぐ)った。

◇

偶然開いた美月の日記。それはちょっとした恋愛小説の一部ようでもあった。ただ、それには、とても重要なものが致命的なまでに不足しているように感じた。たとえそれが日記であったとしても、恋愛小説であったとしても――。

5月24日　曇りのち晴れ
今朝も高浜君が一緒に登校してくれる。もう体調が悪くなることもほとんどないし、そろそろ一人で登校しても大丈夫。そのことを高浜君に言わないと――。
授業は特に変わり映えもなく、時間割通り。
放課後は駅まで栞と一緒に歩いた。今日の栞との話題はファッション。栞が左右で違う色のオーバーニー（片方がグレー、もう片方がダークパープル）を履いていたことが、そ

の話題になった原因だった。別に今そんなファッションが流行っているわけでもない。そもそも栞がオーバーニーを履いているのを見たのは今日が初めてだった。だけど、その奇抜なファッションは栞には妙に似合っていた。背はちっこいくせに――いや、この場合、身長は関係ないんだけど――やけにすらっとしていて長く見える脚に色違いのオーバーニー、学校指定の紺のスカート、その間にほんの少しのぞいている色白の太ももが、確実に男子諸君の目を引くであろう特殊な何かを放っているようだった。その証拠に、今日の男子の栞への視線は普段の三割増しだった。つまり、ロリコン三割増しだった。

私がそんな栞の脚をジッと見ていると、「うみゅう？」とかなんとか、文字にするのが困難な言葉を発した……。

とりあえず、なぜそんな奇抜な脚をしているのか聞いてみると、「流行は追っても、乗っても面白くないんだよ。自ら作り出してこそ面白いんじゃない」という答えが返ってきた。

栞と別れ、一・二番線のホームに降りると、そこから少し離れたところに高浜君がいた。中間試験五日前からは部活が休みだから、そこに彼がいること自体は殊更（ことさら）不思議なことでもない。ただ、彼は私の知らない女子と何やら話をしていたのだ。それを見て、私は咄嗟（とっさ）に、今降りてきた階段の影に隠れた。そこから、そっと高浜君の方を窺（うかが）う。彼が話してい

る相手は、制服からして同じ高校の女子であることは確かだった。だけど、彼女は私に対して背を向けているため、誰なのかは分からない。それに、もし顔を見れても、同じクラスの女子なら誰か分かるけど、違うクラスや違う学年だったりしたらもうお手上げだ。何の話をしているかは、距離が遠すぎて、全く聞こえない。

彼らの方に近づいてみようかと考えていると、一番線（私が乗らない方）に電車が来た。彼と話をしていた娘が乗る電車だったらしく、彼女は小走りにその電車に乗り込んで行った。そして、その電車を彼は笑顔で手を振って見送っていた。

その後、一分もしないうちに二番線に電車が来た。

私は、その電車が発車して、次の電車が来るまでの十分間、階段の影から動かなかった。

――それから、私は一人で家に帰って、試験勉強をちょっとだけやって、あとはボーっと考え事をしていた。

◇

「大丈夫か？」

放課後、自分の机で頬杖をついていた私に、いきなり高浜君が話しかけてきた。

「？」
えーと……言われていることの解釈に困る。
今私は単に頬杖をつきながら遠い目をしていただけであって、決して意識を失っていたわけでも、走馬灯を見ていたわけでもない。
――窓から入る、傾きかけた太陽の光を浴びながら、ちょっとここで眠るのも悪くないかもしれない。そうしようか。いや、むしろそうするべきだ。などと考えていた所為で、現在、知能指数が大幅に低下している私には、その程度の思考が限界だ。
さて、どう返答したものか。
うん、困った。困った。困った。
「ハテナ？」
……うわー、困り過ぎて、自分でも意味わかんないことを口走ってしまったよ！
「……おまえ、なんか最近、ときどき変じゃないか？」
「変？　私が？」
とても心外だ。
非常に残念だ。
言い換えるなら、誠に遺憾でござる。

ござる？
やっぱり私は変なのかもしれない……。
「まあ、なんだ、その……色々頑張るのもいいけど、あんま無理すんなよ」
そう言うと、彼は私の頭をポンポンと叩くと――視界が上下にぶれたから、それなりの強さだったのだろう――心配そうな顔から一転、笑顔を私に向けて。
「んじゃ、俺は部活行くから」
と、手を振りながら教室から出て行った。
――そして、この教室は私一人になったのだった。
まあ、とはいえ、静まり返っているわけではない。この教室という空間の中に音を発するものはないけれど、開け放されたドアから見える廊下はまだ人通りが多いし、遠くからは早々に部活を開始しているどこかの部の、「イチ、ニ、サン、シッ」という声が聞こえてくる。
そんな放課後の静かな喧騒（けんそう）。
私は、今からの自分の取るべき行動を考えることにした。
ついさっきまでは、「寝る」という選択肢が「帰る」という選択肢を数光年先まで追いやるくらいの勢いで勝（まさ）っていた。まあ要するに、寝ようと思っていたのだけれど、高浜君

のお陰で、今はそんなに眠気もなくなってしまった。
なくなってしまった、のだけれど……今の私にある選択肢は――。
帰る。
寝る。
その二択だった。どんなに考えてもその二択だった。どうしようもなくその二択だった。
部活に行くとか、バイトに行くとか、遊びに行くとか、そんな素敵な選択肢は一切存在していない。皆無なのだ。まあ、でも、選択肢があるだけ幸せだと思う。全く選択肢がないよりは、選ぶ楽しみが、考える楽しみがあるというものだ。
何やら、白いコートを着た、色白の、小さな女子が私の目の前に跳ねるようにして現れた気がするけど、気にせずに私は私自身の選択肢をどうすべきか考え――。
「やほー。一緒に帰ろー」
「……」
選択肢が「帰る」の一択になった。「なにやら妙に白い少女と一緒に」という、思いがけないオプション付きで――。

◆

それは凄惨（せいさん）な事故だったらしい。

らしい、なんて、他人事のようだし、いかにも伝聞的だけど、実際、これは人から聞いて初めて知った話なのだから仕方ない。

その日、私こと斎藤佳苗（さいとうかなえ）は友達の家に向かって自転車を走らせていた。

慣れ親しんだ道。

いつも通る横断歩道。

信号はもちろん青。

ただ、ちょっと左右の確認を怠（おこた）った。

それだけ。

最期に聞いたのは自動車の耳を裂くような急ブレーキ音だった。

骨は何本も折れていたし、一部の内蔵にもダメージがあったらしい。そして何より、頭の打ちどころが悪かった。いや、全く受け身も取れずに、頭からアスファルトに叩きつけられれば、打ちどころも何も関係ないだろう。つまり、それが致命傷だった。

そんなわけで、不治の病に罹（かか）って恋人とロマンチックかつドラマチックなあれやこれや

のイベントを経たわけでもなく、戦いの最中（さなか）で「ここは私に任せて先に行くんだ！」とか言ったわけでもなく、私の十四年ちょっとという短い人生は、呆気なく幕を閉じた。

◇

白い少女は、本当によく喋るし、何より表情がとても豊かだ。というか、表情が大げさだ、と言った方が正しいかもしれない。他人とのコミュニケーションが著しく不足している私にも瞬時に分かるくらい、大げさに喜怒哀楽の表情を作っている。

ただ、あまりに取りとめのない話を次々にするものだから、私の脳の処理が追いつかず、話の内容はほとんど記憶に残っていない。まるで、スクランブル交差点の真ん中に立って、行き交う人々の会話を聞いていたような、そんな感覚だった。だから、より一層、その大げさで分かりやすい表情が深く印象に残ったのかもしれない。

駅前に着いて、そのまま駅に入って行くのかと思ったら、彼女が細い指で私のコートの裾をクイッと引っ張り、今日一番の笑顔で、小さな喫茶店を指差した。

「ちょっと、寄っていかない？」

特に断る理由もないから、二つ返事で同意して、その喫茶店に入ることにした。

「あ……」
彼女の後ろについて、お店のドアをくぐったところで気がついた。
私、お金、持ってるのだろうか？
うーん……まあ、鞄を漁れば財布の一つや二つは出てくるだろう。
いや、二つも出てきたらそれはそれで困る気がするけれど……。
「うん？　どしたの？　そんな、いきなりセパタクロー日本代表に選出されたような顔して？」
「セパタ……？」
なんだろう。新手の格闘技か何かだろうか。
「大丈夫、大丈夫。あなたにはセパタクローの十分な才能があるから」
な？　え？　励ま……応援され、て……？　んんっ!?
などと、私が混乱しているうちに、彼女はスタスタと店の奥へ歩いていき、窓際の席に座った。そして、笑顔で私を手招きしている。
あまりの素早さに、呆気に取られながらも、小さな丸テーブルの彼女の向かいの席に座った。
「あはは。じゃあ……あ、とりあえず、注文しようか。何か嫌いな飲み物ある？」

「ええと……特には……」
「おっけー。じゃ、マスター、『本日の黒い飲み物』二つお願いしまーす」
「黒い飲み物!?」
あいよー、とカウンターにいた痩せ型で口髭を生やした男性が無表情で答えた。
「そ。『本日のコーヒー』ならぬ『本日の黒い飲み物』」
「い、一体なにが……？」
「まあ、大抵は何かしらのコーヒーだね。たまにコーラとか黒ウーロン茶とかのときもあるよ。あー、あと稀に、黒蜜」
「黒蜜!?」
「うん。中ジョッキに入ったやつがドンと出てくる」
「それ……飲み物？」
「一応液体だから飲めなくはないかな。ドロドロしてるけどねー」
「……」
そういう問題なのだろうか。いや、絶対にそういう問題じゃない。ドロドロしているのも嫌だけど、それ以上に、ムチャクチャ甘いじゃないか。凄くドロドロしているムッチャ甘い液体……。

唐突に、「どろり濃厚」という謎の単語が脳内に浮かんだけれど、私の記憶内の単語ではない気がする。……まあ、気にしないことにしよう。

などなど、期待よりも不安の方が十倍ほど大きな状態で待たされること数分、出てきたのはごく普通の白いコーヒーカップに入った、ごく普通の黒い――表面の泡は茶色っぽい――液体だった。見る限り、少なくとも、ドロドロはしていないようだ。

「エスプレッソのダブルでございます」

それだけ言うと、マスターはお辞儀をして、カウンターの方に戻っていった。

エスプレ……？　ダブル？

エスプリの親戚？

エスプリが利いたジョーク。

エスプレが利いたジョーク？

……関係はない気がする。多分コーヒーの種類か何かだろう。

じゃあ、ダブルって何だろう？

シングルスとかもあるのだろうか？

……テニス？

そんなことを考えながら、私はそのエスプなんちゃらとかいう液体に口をつける。

「――苦っ」
予想以上に苦かった。こういうときは砂糖とかミルクを入れればいいはずだ。
「ええと……。砂糖とミルクは？」
「ああ、砂糖はこれだよー」
そう言って、テーブルの隅にあった白くて四角い容器の蓋を取って渡してくれる。角砂糖だ。
「ミルクはないよ。だって、ミルク入れたら、『黒い飲み物』じゃなくなっちゃうじゃん」
「……」
そういう問題なのだろうかと、少し悩みながら、角砂糖を二つコーヒーの中に沈めて、かき混ぜた。
それから、数分間、お互いコーヒーを飲みながら、無言になった。私は単純にエス……エスプ……コーヒーの味を楽しんでいたから言葉を発さなかったのだけれど、これまで絶え間なく喋り続けていた目の前の少女が無言になったのには少し違和感を覚えた。
半分ほど私のコーヒーがなくなったとき、彼女は口をつけていたコーヒーカップをカチリと静かに置いて、沈黙を破った。
「さてさて……はじめまして、だね。佐々岡美月さん」

彼女はこともなげにそう言うと、笑顔のままで――。
「私の名前は清澄栞。自称、万能少女だよ」
そんな、理解に苦しむことを言った。

◇

いやいや、あなたが怪訝そうな顔をするのも良く分かるよ。というか、これを聞いて、はいそうですか、と納得してもらっても、それはそれで困るよね、うん。何しろ、私とあなたはこれが初対面なんだから。私の記憶が正しければ、だけどね。
――ああ、そうか、初対面だから当然この冗談も通じないわけだ。うーん、別段笑える冗談でもないんだけどねー。どっちにしても、物事は正しい順序を踏むのが大切だというわけよ。
じゃあ、私の能力全部紹介してたら文字通り日が暮れちゃうから、たぶん他人(ひと)から見たら一番凄い能力を紹介するね。その能力、私は瞬間写像記憶能力って呼んでるんだけど、世間では瞬間記憶能力か映像記憶能力とか色々な呼ばれ方をしてるみたいだね。ま、呼び方なんてどうでもいいよね。で、どんな能力かっていうと、目に映ったもの全てを映像の

ように、または連続した写真のように記憶して、それをずっと覚えていられる。簡単に言っちゃえば、「見たものは全て忘れない能力」だね。

やー、そりゃ信じられないだろうけど……。よし、じゃあ、あなたの鞄の中から、何か適当な教科書を出してみて。

いいから、いいから。

――世界史だね。じゃあ、私は後ろ向いてるから、好きなページ開いて、その中の好きな一文を読み上げてくれるかな。

――えーと、それはね、百三十七ページの最初の一文だね。

手品でもなんでもないよ。単に、覚えてるだけ。……これで少しは信じてくれたかな？

ん？　他の能力？　そうだねー。分かりやすいところでいけば、絶対音感かな。あとは……そうだ、これの方が実践しやすいな。高速暗算。えーと――あった、あった。じゃあ、この紙に好きな計算式書いて。四則演算ね。どれだけ長い式になってもいいよ。あと、どんな大きな数使ってもいいし、分数使っても、小数使ってもいいよ。あ、もちろんゼロで割るのはなしね。それはルール違反だから。

――ん、じゃあそれ見せて。

えっと、ああ、随分綺麗な答えになるね。答えは一〇二四。

え？　いやいや、綺麗じゃん。二の十乗だよ、これ。

――さて、そろそろ本題に戻ろうか。いや、戻るも何も、まだ本題に入ってすらいなかったね。あはは。まあ、そんなこんなで、こんな常人離れした能力、しかもほとんどが生まれつきの能力をたくさん持っちゃってる所為で、私はかなり小さな頃から、具体的には小学校四年生の頃から、ありとあらゆるものに興味が持てなくなって、気力、生気を失っていたんだ。有り体に言えば、人生がつまらなかった。

そりゃそうだよ。なんでも他人よりずば抜けてできて、やろうと思ってできないことなんてほとんどなかった。もちろん、できないこともあったけど、別に、それをできるようになりたいとも思わなかった。必要なかったし、面白そうでもなかったから――。

天才少女、とか言われて、テレビに出されたこともあったなぁ。そんな風に、周りにもてはやされて、羨ましがられれて。でも、それが癪だったんだよ。私は全然楽しくもなんともないのに、周りだけが面白おかしく騒いで、勝手に羨望の目で私を見て――。

それで私は余計に何もしたくなくなった。だから、それから無為に過ごす日々がずっと続いた。能力を表に出さないようにして、何も考えないようにして――。

中学一年生になっても私はそのままだった。でも、そんな私にストーカーの如く付きまとった挙句、気を抜いていた私に鎌かけて、私に勝負を挑んで、その上、私を今のこの私

に変えてくれたクラスメイトがいたんだ。
斎藤佳苗。ショートヘアーで、目がクリッと大きくて、身長は百六十六センチで、体重は……言わない約束――、右利きで、運動神経が良くて、とりわけ足が速いのが自慢で、明るくて、人懐っこくて、お節介で、人をまとめるのが上手くて、自分よりも人のことを優先する性格で、そして、私の親友で――。
佳苗のお陰で、私は色んなことが凄く楽しくなった。彼女に出会うまでの私の人生がモノクロなら、彼女に会った後はフルカラーだった。1ビットカラーから32ビットカラー。2色と１６７７７２１６色。ホントにそれくらいの違いがあったんだよ。なにより、佳苗と一緒に過ごす時間が、とても楽しかった。
でも、それは一年も続かなかった。私が佳苗と仲良くなってほんの数ヵ月後に、彼女は事故で死んでしまった。車にはね飛ばされて、頭を強く打って……脳死という状態になった。医療器具で心肺機能は動いていたけど、それだけ。意識を取り戻すことは絶対にない状態。……だから、彼女の心臓は、心臓の病気だった同じ年齢の女の子に移植された。
佐々岡美月。あなたに――。

◆

少しづつ、身体（からだ）を思うように動かせなくなっているのを感じる。徐々に、感覚が薄くなっているのを感じる。それは、まるで私の身体が、私の身体でなくなっていくかのように――。や、それは間違い。それが間違い。この身体はそもそも私の身体ではないのだから当然のこと。私の身体でないものが、私の身体のように動かせていた今までが異常だっただけ。

私は斎藤佳苗で、この身体は佐々岡美月。

より正確には、今こうして物事を考えているのは斎藤佳苗で、でも、それを考えている脳や身体――心臓以外すべて――は佐々岡美月。

なぜ斎藤佳苗の脳でないのに、斎藤佳苗の記憶を持っていて、斎藤佳苗として考えることができるのか。それはいくら考えても分からないし、今はもうどうでもいいことだ。それよりも、とても疑問だったのは、佐々岡美月はどこに行ってしまったのか、ということ。当然私は美月の記憶は持っていない。美月のことは何も分からない。だけど、この脳は美月のものなのだから、美月の記憶がないはずはないのだ。むしろ、私の記憶があることは異常であり、不可思議なことなのだ。

じゃあ、美月は一体どこに――？

心臓移植後、目覚めたときから、私は佳苗であり、美月ではなかった。ただ、術後、この身体は長いこと眠り続けていて、私が目覚めるまでに約一年を要したらしい。

そこから強引に導き出した一つの答えがあった。

そこから純粋に感じ取った一つの使命があった。

そして、今、その使命を果たし終えるときがきたのだ、と、そう確信した。

だから私は、今日の日記の代わりに、短いメモを残した。

佐々岡美月へ――。

◇

夜に目覚め、ベッドに横たわり、暗闇の中、ひたすらに朝を待つ。私が眠りに就くのを待つ。彼女が目を覚ますのを待つ。それが私の日常だった。

隔絶された空間。

ひどく現実味のない世界。

暗く、暗く、ひどく暗い、まるで牢獄のような部屋で、孤独に包まれ、夜をたゆたう。いくつも、いくつも、数え切れないほどの夜を、夢を見ることすらなく――。

取りとめのないことを、考えた。

例えば。

――私は何者なのか。

美月の身体に在りながら、美月とは違う。美月が起きてる間の記憶はまったくない。美月が眠っている間だけ、私は私としてここに在る。いつから私はここにいるのか、どうして私はここにいるのか、全然わからない。

思い返すと、私の記憶はいつも暗闇だった。美月は部屋の明かりを完全に消して寝るから、私が起きると、当然真っ暗な部屋の中だ。もちろん少し動けば、明かりを点けることもできた。でも、昔はそれをすることでさえ億劫（おっくう）になるほど、私は彼女の身体を上手く扱えなかった。目を開けているのに、上下左右が分からないくらい平衡感覚がなかった。だから、首だけ動かして、回りを見て、ようやく自分がベッドの上にで横になっているということを認識できるくらいだった。

起き上がって、そこそこ普通に歩けるようになったのは数ヶ月前だったと思う。でも、それが本当に数ヶ月前なのかは自信がない。こうして毎日毎日、夜に目が覚め、大抵は何

をするでもなく横になったまま朝を迎え、眠りにつくのだから、今日が何月何日かなんて私には関係のない、どうでもいいことだった。だから、私が初めてまともに歩けたのがいつで、それからどれくらいの月日が経ったのかなんて分かるわけがない。私が勝手に数ヶ月前だと思っているだけで、実は数年前だったのかもしれないし、数日前だったのかもしれないけど、やっぱりどうでもいいことだ。

でも、こんなどうでもいいことでも、考えることがあるだけマシ。何も考えることもなく、空っぽの思考と冷え切った心で、ただ天井を眺めるしかない夜もあった。何もすることがなくて、何も考えることがなくて、横になったまま目蓋を閉じてみても、美月が眠っている間、私は眠ることができない。だから、いくつもの長い長い夜を、自分の存在さえも曖昧になるほど無気力に繰り返してきた――。

そう、これまで私は自分で自分が何者か分からない存在で、昼間に起きて活動している存在が佐々岡美月だと、ずっとそう思い込んでいた。そう思わざるを得なかった。

だというのに、白い少女、清澄栞は、確かに言った。

これまで何者か分からないと思っていた存在が佐々岡美月で、昼間に活動しているのが斎藤佳苗であると。

この私が佐々岡美月で、私の心臓が斎藤佳苗であると。

でも、それは本当なのだろうか。いまだに信じられない。だからといって、栞が嘘を言っているようにも思えなかった。

確かめたい。

どうやって？

わからない。

でも――。

私は、ベッドに横たわっていた自分の身体をスッと起こした。

「え……？」

これまでで一番、それはもう驚いて声が漏れるくらい、すんなり身体を動かすことができた。それはまるで、これが自分の身体であるかのように――。

驚きを隠せないまま、ベッドから降りて、机の前まで歩いて行って、さらに驚かされた。

そこにあった一枚のメモに。

佐々岡美月へ。私は斎藤佳苗と言います。もう気づいているかもしれないけど、これまで、あなたの身体を昼間好き勝手に動かしていたのは私です。でも、あなたがこれを読んでいるなら、あなたの意識があって、あなたが自由に動けているのなら、私はもう必要な

いでしょう。私があなたの代わりに動いていた間のことは、できる限りこの下のノートに記録してあるので、読んでください。（量が多いから、適当に）

私は、そのメモが意味することを深く考える間もなく、その下に積んであった、十冊以上もの大学ノートの一番上に積まれていた、表紙に「1」と書かれているノートの最初のページを開いた。

佐々岡美月が目を覚ました後、それまでに何が起こっていたのかが分からないと困ることがあるだろうから、記録をつけていくことにする。

これが最初の記録だけれど、実際は三ヶ月ほど前から私こと斎藤佳苗は目覚めている。私は、今はあなたに移植された心臓のはずなのだけど、なぜか移植手術の後、あなたが目覚めなくて、私が目覚めた。その時はわけが分からなかったし、今だってどうしてこんなことになっているのか、正確なところは理解できていない。だけど、このことは誰にも話していない。医者にも、あなたのご両親にも。初めはそんなこと話しても信じてもらえないだろうと思ったからそうしていたのだけど、今は別の理由で話さないことにしている。

私が目覚めてから三ヶ月はリハビリの毎日だった。なんせ術後一年も眠り続けていたの

だから、身体はガチガチに固まってしまっていて、ほとんど動かすことができなかったのだ。そもそも、私のものではない身体を動かせるようになるのか不安だった。最初は感覚さえも物凄く鈍くて、何かに触れてもそれを感じるまでに随分タイムラグがあった。不安で、苦しくて、とにかく辛い日々だった。それは、言葉にもできないくらいに――。

でも、必死にリハビリをしているうちに段々自分の体のように動かせるようになってきた。まだぎこちなくて不格好だけど、今ではこうして、他人が読めるくらいの文字も書けるようになった。

ここまで私は動けるようになって……でもあなたはまだ目覚めなくて――。

その理由は分からない。

けど、あなたはいずれ目覚める。必ず。そう私は信じている。

なんせ、これはあなたの身体なのだから。

今はちょっとしたイレギュラーで私が意思を持ってしまっているけど、それはきっとあなたが目覚めるまでの一時的なもの。

だったら、私がやるべきことは、あなたが目覚めるまで、あなたの代わりに身体がしっかり動くようにして、体力つけて、学校に行って、勉強して、友達も作って、あなたが目覚めたときに、辛い思いをしないように、いや、それどころかむしろ楽しく過ごせるよう

に、行動していくことだ。だって私は、あなたの心臓。あなたの一部。当然、望んでこうなったわけでも何でもないけど、こうなってしまった以上は、あなたのために動き続ける。

一生、あなたのために。

一生、あなたとともに。

――それが私の使命だと思う。

そのためには、私は斎藤佳苗であってはいけない。言い出すタイミングを完全に逃してしまったというのもあるのだけど、いま私が美月ではないなんてことを言い出せば、きっと周りの人は悲しむし、これから先いろいろなことが上手くいかない。だから、私は佐々岡美月として振舞うことにする。でも、私には美月の記憶はないから、どう振舞えばいいのか分からない。ただ、都合のいいことに、美月としての記憶を持っていない私のことを、医者や美月のご両親は、「記憶喪失」だと思っている。長い間意識が戻らなかったことで、一時的に過去のことが思い出せなくなっているだけだ、と。つまり、期せずして、とても都合のいい状況になっている。

このまま私は「記憶喪失の美月」として美月が目覚めるまで生活して、美月が目覚めたら、すべてを美月に引き継げばいい。もし私が美月の代わりをしている間の記憶が、目覚めた美月になかったとしても、この記録を見てもらえれば、すべてとはいかないまでも、

大部分は引き継げるはずだ。
そうできるように、私はこれから毎日、なるべく詳しくその日に起こったことを記録していくことにする。美月が読んだときに、ちゃんと分かるように書いていく。そして、美月の主観で読めるように、なるべく私の主観や私の思いは書かないようにしていく。

――そこまで読んで、私は一旦そのノートを閉じた。
それは、私が、「美月の日記」だと思っていて、何度か勝手に途中を読んだことがあったものだった。だけど、それは「日記」ではなく「記録」だった。ついでに言えば、「美月の」ではなく「斎藤佳苗の」だった。
そう、これは記録。だから、この最初の記録を除いて、彼女の感情や思いはほとんど書かれていないのだろう。実際、前に少し読んだページはそんな感じだった。だから、読んでいて違和感を覚えたのだろう……。
まあ、ともあれ、これで私が佐々岡美月であることはほぼ間違いないことが分かった。だけれど……ひとつ、疑問というか、問題というか、切実なる欠陥が残っている。
私の、佐々岡美月の記憶だ。
私が移植手術を受ける前の記憶。

それが、全く思い出せない。
それが思い出せなければ、結局のところ、私は佐々岡美月であって、佐々岡美月ではない。
だって、私は、空っぽだ。
机の上に何冊も積まれている「記録」を見る。
佳苗には佐々岡美月として過ごした日々がこんなにもある。佐々岡美月として生きた記録が、記憶が、こんなにもある。だったら、私よりも佳苗の方が、よっぽど佐々岡美月ではないか。
私は、どうすればいい？
私は、何をすればいい？
私は、どうやって生きていけばいい？
それは途方もなく、漠然（ばくぜん）とした、悩み。
たとえば、「帰るか、寝るか」といったように明確な選択肢があるなら、まだ考えようがあった。でも、今は何もない。真っ黒な濃い霧の中で立ち尽くしている。そんな感じ。
スッと、身体の力が抜けて、持っていた一冊目のノートが、手から滑り落ちた。
トン、とその角が左足の甲に当たった。

「いたっ」
痛みを、感じた。とてもはっきりと。凄く近い距離で。
話をしたことも、会ったことすらない斎藤佳苗が言っている気がした。
「何やってんのよ。私のこれまでの頑張りを無駄にする気？」と――。
ああ、そうだった。これからの生き方とか、そんな漠然としたことを考える前に、今の私に、確実にできることをしよう。
読もう。
佳苗が残してくれた、たくさんの記録を。彼女の想いを。
そこに、彼女の思いは書かれていないとしても、それ自体が、それ全てが、彼女の想いなのだから。

なんていうか、ますます負けられなくなったってことかな。

◇　4　◆

◇

明け方、窓を開け、外を見る。
遠くの空が、下の方から明るくなってきている。
濃い紫色から、群青色（ぐんじょう）へと変わっていく。
吐き出した息が空気を白く染める。
少し動かした指先に、窓のサッシに付いていた水滴が触れた。
「冷たっ!?」
思わず、口に出して、手を引っ込めた。
部屋の中に入ってくる風が、冷たい。
そう、冷たいと感じる。
寒いと感じる。

ああ、寒いって、こんな感じなんだ。
身体(からだ)が内側から痺れてくるような、そんな感じ。
とても新鮮な感覚。
だから、少しだけその感覚に身をゆだねながら、思考を巡らせる。
――いつもなら、眠くなってくる時間。
今日も段々眠くなってきてはいるけれど、まだ、寝たくない。
こんなことを思ったのは、初めてだ。
理由は色々あるだろう。いや、色々あることが理由なのだ。考えることが色々ありすぎて、しかも、ポジティブな感情とネガティブな感情が入り混じって、頭の中がぐちゃぐちゃになっている。この感情を少しでもスッキリさせないことには、どうにも眠れそうにない。
外の空気でも吸えば、この状態が少しでも改善するかと思ったけど、実際はそうでもなかった。一晩中、佳苗が残した記録を読んで、色々考えた挙句(あげく)、なんの結論も出せず、なんの決断も下せないままこんな時間になってしまったという事実が突き付けられただけだった。
でも、あと少しな気がする。

あと少しで掴めそうな気がする。
佳苗の記録を読んでいる間、何度か、その内容とは関係ない光景が一瞬頭の中にフラッシュバックしては消えるということがあった。それらは、確信は持てないけれど、きっと私の、佐々岡美月の記憶だ。一瞬だけ浮かび上がっては消える、いくつかの記憶。連続はしていない点の記憶。無数の点は、一つの線になるはず。ただ、それにはまだ足りない。足りなすぎる。
無理矢理思い出そうとすると、酷い頭痛がした。
だからだろうか。
自分の記憶を取り戻すことで、何か大切なものを失ってしまう。
そんな気がした。
だとしても、記憶は絶対に取り戻したい。
だって、それがなければ、私はいつまでも佐々岡美月に戻れないから。
だって、それはきっと佐々岡美月のアイデンティティそのものだから。
「――――っ」
不意に、身体がブルっと震えた。
……ああ、窓、開けっ放しだったっけ。

窓を閉めてからそこを離れる。
冷え切った身体を自分で抱くようにしながら、結局全部は読み切れなかったノートの山を見やる。
その脇には、それらを読み始めるきっかけになった、佳苗のメモがある。
……ああ、そうだ。佳苗はまだ私が目覚めているかどうか、ちゃんと分かってるわけではないんだ。ただ、状況からそう判断しただけなんだろう。だとしたら、このまま彼女に何も伝えないのは色々とマズイ。
よし、私も彼女に倣って、メモを残すことにしよう。
私は佳苗が書いてくれたメモを裏返し、そこにカチカチ出したシャーペンの芯を当てた。
斎藤佳苗へ――。
文字を書くのは、私が目覚めてから、これが初めてではないだろうか。いや、初めてだ。
それにしては、意外と素早く、意外と綺麗な文字が書けるものだ。
身体が覚えているのか。
それとも、身体が思い出しつつあるのか。
あるいは、佳苗のお陰なのか――。
なんにしても、ほんの少し前までは、靴紐を結ぶことすら困難だった私が、普通に字を

書けたという事実。それは私にとって本当に奇跡のような出来事で、心の底から喜びが込み上げてきた。

自然と、顔がにやけていた。

メモを書き終えると、一仕事終えた達成感からか、緊張の糸が切れたのか、一気に眠気が押し寄せてきた。大群になって押し寄せてきた。

――意識が一気に落ちていく。

ちゃんと、ベッドの上まで移動したのかどうかすら、定かではなかった。

◆

私の……もとい、美月の両親は共働きで、しかも二人ともシステムエンジニアとかいう小難しい名前の職業だ。業界ではＳＥなどと呼ぶらしいけど、別の業界では効果音（サウンドエフェクト）という意味に取られかねない。や、「職業が効果音」って、意味不明もいいところだが……。そういえば以前お父さん――正確には美月の、だけど――が、「ＳＥというのは『少しエロい』の略だから覚えておけ」などと間違った知識を私に植え付けようとしていた。もちろん私はそんな嘘に騙されることはなかったけど、もしお父さんに

権威と名声があったら危ないところだった。なにしろ某有名漫画家はＳＦを「少し不思議」の略にしてしまったのだから……。

それはさておき、ＳＥという仕事にはフレックスタイム制というシステムが導入されていることが多いらしく、美月の両親の職場にもその制度がある。どういう制度かというと、簡単に言えば、決められた時間――美月の両親の職場の場合、午前十時から午後三時――に職場で働いていて、かつ就業時間だけ働いていれば、あとは何時に出勤して、何時に帰宅してもいいという制度らしい。つまり、朝早く出勤して、その分早く退勤してもいいし、遅く出勤して遅く退勤するようにしてもいいということだ。とはいえ、忙しいときは忙しく、暇なときは暇という職種でもあるらしく、忙しいときは朝早く出て夜遅く帰ってくるか、徹夜という場合もあるけど、暇なときは朝遅く出て、夜も早めに帰ってきたりする。

そんなわけで――。

「今日は、暇なのね」

私はリビングでなぜかパジャマ姿のまま三点頭立をしているお父さんに話しかける。

「ふはは。昨日大きなプロジェクトが完遂したからな。徹夜地獄ともこれで当分おさらばだ」

無駄に割れている腹筋が見えている。

「見よ、この無駄に洗練された無駄の無い無駄な動きをっ」
言いつつ、三点頭立から頭を浮かせて普通の倒立に移行。そしてすぐに三点頭立に戻す。
そしてまたすぐに普通の倒立に――。これを高速で繰り返す。
冬の朝だというのに、額（ひたい）に汗が滲んでいる。
見ていて暑苦しい。
「ふはははっ。頭に血が上（のぼ）るぞっ」
だったら今すぐにでも止めてほしい。
「あ、美月、朝ごはんできてるわ、よっ」
そう言いつつ、キッチンから早歩きでこちらに近づいてきたお母さんは、最後の「よっ」と同時にお父さんの足を思いっきり後ろに押した。
「ぬおっ!?」
当然、体勢が大幅に崩れる。
「むむむむむ――」
思いっきりエビぞり状態のまま耐えている。そして――。
「起き上がりこぼし！」
謎の掛け声とともに逆立ちの体勢に戻った。

「ふっ。我が筋肉と背筋の前ではその程度の攻撃は何の意味も成さんのだよ」
「それなら……やあっ」
「む？　むむむむむむむむむっ!?　あっっーーー!!」
バタンと横に倒れて、もだえ苦しむ。
「熱い！　足の裏が妙に激しく熱いにょ！」
熱さのあまり語尾がおかしくなっている。
「あら。ごめんなさい。偶然手元に目玉焼き作ってたフライパンがあったからつい――。
ああ、安心して。目玉焼きはもう全部作り終わってお皿に移してあるから」
「や、そういう問題じゃないよ、お母さん」
さすがの私もツッコミを入れざるを得ない。
「えっ？　他にどんな問題が？」
笑顔でそんなことを――。
「くそっ。こうなったら、お前のキーボードのエンターキーとバックスペースキーの動作を入れ替えてやる！　文章を打ち終わってエンターを押すたびに最後の一文字が消えるという恐怖に戦(おのの)くがいい！」
凄んでいる割にとても微妙な嫌がらせだった。恐怖でもないし、戦きもしない。

「じゃあ、お返しにあなたが愛用してるマウスの右リックもチャタリングするように物理的に故障させておいてあげる」
「なにっ!?　左クリックだけでは飽き足らず、右クリックまでだと!?」
既に左クリックは故障させられているようだった。というか、そんなマウスをまだ使ってるのか……。
「右クリックがチャタリングしても左クリックほどの被害はないが、なんか地味に嫌な気分になるっ」
私には意味がわからないけど、どうやらこちらも地味な嫌がらせのようだ。――というか、チャタリングって何だろう？
「では説明しよう。チャタリングとは――」
何も言ってないのにお父さんが説明し出した。いま私、不思議そうな顔でもしてたのかな……？
「チャタリングとは、イカの胴を輪切りにして衣を付けて油で揚げたとても美味しい――」
「それはイカリング！」
カンッと、フライパンで後頭部にツッコミを入れるお母さん。
「ぐはっ!?　後頭部が痛熱い！　というわけで、今日の夕飯のおかずにイカリングを希望

する」
「はいはい。どさくさに紛れて夕飯のリクエストしないの。夕飯の話はいいから、まず朝食を食べましょうね」
「ふむ。苦しゅうない」
腕を組んでふんぞり返るお父さん。
「何様よっ」
カンッ！
「ふおっ!?　今度は頭頂部が痛熱いっ！」
「あら。ごめんなさい。偶然手元にフライパンが――」
「くそぅ！　いい歳して大人げないぞ！」
「あらやだ。私はまだ二十六歳よ」
「二十六だと。何を言って……はっ!?　それは十六進数で表してるなっ！」
「年齢を十進数で言わなければならないなんて決まりはないわ」
「くっ……相変わらずムカつくどや顔だなおい」
――そんな、美月の両親がともに仕事に余裕があるときの、普通の朝だった。

◆

私は薄くなった感覚を頼りに、なんとか駅までたどり着いた。というか、家から駅まで、普通に歩いて十数分の距離なのに、ここまで苦労するとは……。

ふと、リハビリをしていた頃を思い出した。

そうだ。あの頃は、もっと薄い感覚の中で、必死に歩く練習をしていたのだった。

あの頃と比べれば、今は全然マシだ。うん。いけるいける。

今朝、寝起きに見た美月の返事。

「斎藤佳苗へ。佐々岡美月です。今まで本当に色々ありがとう。実は、今の私には移植手術を受ける前の記憶がないんです。でも、もう少しで思い出せそうだから、安心してください。だから、それまで、私が記憶を取り戻すまで、あとちょっとだけあなたに任せてもいいですか？」

――もちろん！

私はそう答えた。

そう返事をメモに残した。

だから、まだ、頑張らなくては。

でも、美月には悪いけど、ちょうどよかったかもしれない、とも思う。なにせ、明日は例の球技大会の日なのだ。最後にそれくらい楽しませてもらっても、バチは当たらないだろう。

改札を通り、ホームまで、階段を下りていく。

慎重に、慎重に。

足元を見ながら、ゆっくりと。

……こんなんで球技なんてできるのだろうか。

難しいだろうな。

でも、ノリと勢いでなんとかなるかなぁ……。

などと考えながら、階段を下り切り、そのまま自分の足元を見ながら歩いていると、ドン、と頭が誰かにぶつかった。

「あっ。ごめんなさ――って高浜君？」

慌てて顔を上げると、今ぶつかった相手が高浜君だったことに、多少の驚きを覚えた。

だって、今日は普通にバスケ部の朝練があるはずなのだ。

「よう」

「おはよう。えーと……」

挨拶をしながら、私は高浜君がこの時間にここにいる可能性を二つほど思いつく。
「今日も栞たちにコート乗っ取られたの？」
「いんや」
はずれ。
ということは、考えられる可能性はあと一つ。
「じゃあ、寝坊？」
「残念。それも違うんだなぁ」
おっと、手詰まりだ。
オセロで四つの角すべてを取られたときの気分。
ここは降参するのが潔(いさぎよ)いだろう。
「じゃあ、なんでこの時間にここに――？」
「昨日の夜、なぜか清澄さんから俺のケータイに電話があって。いや、ケータイの番号教えた記憶はないんだけどね……。なんで知ってるんだろ……。まあ、それはいいや。で、清澄さんが、『明日の朝、美月が大変なことになってるかもしれないから、駅で待っててあげて。ああ、彼女の家の前で待ち伏せしててもいいよ。その場合、私が、クラスメイトの女子の家の前で待ち伏せしてるストーカーがいます、って通報するけどね』とか言って

いたからさ」

「……」

流石（きすが）は栞だ。

読まれている。

気づかれている。

それも、完璧に。

――高校一年生の初め、同じクラスに清澄栞がいたことに、私は途轍（とてつ）もなく驚いた。それと同時に自分の目を、耳を、疑った。だけど、その色白で高校生とは思えないほど小さい――「何この可愛い生き物、持って帰りたい」と思うくらいの――少女は、その特徴ある澄んだ声で、確かに言った。「私は、万能です」と。あの容姿で、かつ、初対面の人たちを前に、声高々にそんなことを言える同年齢の女子なんて、私が知っている清澄栞しかいないはずだ。や、いない。他にいてたまるものか。

そもそも、数年前に親友だった人を見間違えるわけがない。

でも、栞が、こんなレベルの低い――偏差値六十程度だけど、彼女にしてみれば低すぎると言っても過言ではないくらいに低い――高校に、なぜ入学したのか。その理由を、同じクラスのミッチーこと、相沢美智子が一年生の初めのころに聞いたらしく、私はミッチ

ー経由で聞いたのだけど、とても単純で明快だった。
『面白そうだから』
ただ、それだけ。
どうやら、栞の目から見て、私たちの高校は、「面白そう」な高校らしい。や、私からしても、実際に面白い。色々と――。ただ、その面白さは、栞がいることで、二倍にも三倍にもなっていることは確かだ。
それはいいとして、私が一年生のときに栞と同じクラスになり、最初に心配したことは、私が斎藤佳苗であることがバレてしまうのではないかということだった。だから最初に栞と話すとき、「はじめまして」という自分の言葉が、緊張のあまり、やけに片言のようになっていた気がした。
心臓移植云々の話をしたら確実にバレてしまうと思ったから、当然それは隠して、過去の話もなるべくしないようにしてきた。
斎藤佳苗としての性格も、なるべく表に出さないようにしようとした。ただ、それはあまり上手くいかなかった。
私は演技が下手だった。
私は自分を偽るのが下手だった。

だから栞に「中学の頃、あなたによく似てる友達がいたんだよー」くらいのことは言われるだろうと覚悟していた。そう言われたときに、いかに自然に、冷静に対応するかも、事前によく準備していた。でも、私が佐々岡美月として栞と仲良くなって、友達として、親友として、ずっと一緒に過ごしてきたけれど、そんなことは一度も言われなかった。

だから、バレていないものだと思っていた。

だから、気づかれていないものだと勘違いしていた。

――ああ、まったく、私はなんて馬鹿なんだろう。

気づかれないはずがないのだ。『栞だから』という一言ですべてを納得させてしまえるほど何もかもが規格外な彼女に、私の存在ごときが、バレていないはずがない。

恐らく、いや、ほぼ確実に、高校一年生のときに初めて会った瞬間にバレていたのだろう。

「おーい。なんかボーっとしてるけど大丈夫か？」

高浜君が私の目の前で手をパタパタ振りながら心配している。

「あ、うん。だいじょ――」

ヴーッ、ヴーッ、ヴーッ、と鞄の中でケータイが震えた。

「あ、ちょっとゴメン。なんかメール来たみたい」

言って、鞄の中からケータイを取り出してメールを確認する。
『差出人：清澄栞　表題：無題』
――栞からだ。
『ハヨー。調子はどうかな？　高浜君送り込んどいたから、よろしくやっといてねー』
何を!?
『あと、お節介かもしれないけど、私から森広先生に話しといたから、何かあったら森広先生に相談とかするといいよ。あ、もちろん森広先生には他の人に言わないように口止めしてるから大丈夫だよー。イジョ』
既にうちの担任にまで根回しをしているとは、さすが栞だ。
私の状態もこんなだし、何かあってからでは遅いから、担任くらいには知られていてもいいのかもしれない。ただ、どこまで栞が話したのかが気になる。あと、あの森広先生にどこまで栞の口止めが効果を発揮するのかも疑問だ。たとえば、森広先生が美月の両親に栞から聞いた話をしないとも限らない。
「――うん。心配だ」
「え？　何が？」
「高浜君！」

「は、はいっ？」
「急いで学校行こっ」
そして森広先生に会って、栞からどこまで聞いているのかくらいは確認しよう。
「ああ、それはいいんだけど――」
何やら困った顔をして視線を横に逸らす高浜君。
「なに？」
「……いや、電車一本分、急げなくなった」
言われて、高浜君の視線の方を見ると、ちょうどホームに来ていた電車のドアが閉まって、ゆっくり走り出すところだった。
「どうして早く教えてくれなかったのっ!?」
無駄に高浜君に掴みかかる。
「お、俺の所為(せい)か？」
「たぶんねっ！」
「たぶんかよっ！」
まあ、よくあるやり取り。
「……」

ただ、今回は私が勢いよく掴みかかったから、お互いの顔がやけに近いことに今気づいた。お互いの呼吸のリズムが分かるくらいの近さ。初めは大して気にならなかったけど、気にし出したら、一気に……一気に、なんだろう？

……恥ずかしい？

近いまま、目が合ったまま、無言の時間が続く。

……や、気まずい！

どうすれば!?

そうだ、私が高浜君に掴みかかっているだけなのだから、私が放せばいいんだ。

「……こほん」

無言のまま高浜君から一歩離れて、咳払いをする。

咳払いという行為が既にわざとらしいけど、その咳払い自体もかなりわざとらしいものになってしまった。やはり私は演技が下手だ。

高浜君は高浜君で、

「むぅ……」

とか言いながら、後頭部を掻いていた。

◆

私は一人で家庭科室のドアを開けた。

そこには――

「ここで待っていれば、必ずあなたは来ると思っていましたよ」

私に背を向け、そんな台詞を言っているのは、数学教師、私の担任、森広先生だった。

「や、そりゃ校内放送で、堂々と私の名前とこの場所を指定して呼び出しかけたら、嫌でもここに来ますって……」

しかも、私が校内に入った瞬間、見計らったように校内放送が入った。

や、問題はそんなことよりも――。

「いえいえ、校内放送をしたのは僕ではありませんし、僕が頼んだわけでもありません」

「そうなんですか……。や、むしろそうでしょうね」

「清澄さんが勝手にやったことです」

まったく……。あいつは放送委員だったか？

いや違う。

即答できるくらいに違う。

でも、私の耳に入ってきた放送の声は間違いなく栞のものだった。第一声で、や、第一オノマトペで分かった。

「なんにしても、『ピンポンパンポン♪』は自分で言うものではないと思うんですけどね」

先生がとても真っ当な感想を漏らす。

「同感です」

ホント悪ふざけもいいところだ。

つーか、なんで栞は私と先生を会わせる場所に家庭科室をチョイスしたのだろうか？

単なる気まぐれなのだろうか。それとも――。

「まあ、それは置いておいて、もうすぐ朝のホームルームも始まってしまうので、早々に本題に入りましょうか」

森広先生は私の方に向き直ると、黒フレーム眼鏡を右手の中指でスッと直しながら言う。

「あの……」

「いや、何も言わなくても大丈夫ですよ。大体の事情は把握しているつもりです。なにしろあの清澄さんから聞いたのですからね」

当然といえば、当然。先生たちの間でも栞の信頼度は途轍もなく高い。

校長先生の意見よりも栞の意見の方が優先されるという噂まであるくらいだ。

そんな栞から『事情』を聞いた森広先生は話を続ける。
「――つまるところ、あなたはクラスメイトの高浜君のことが好き、ということですね」
「……は？」
「しかも、あなたは以前彼から告白されていて、それを断っているそうじゃないですか」
「あの……なんの話を……」
「一度振っているから、今更言い出すことも憚られるのですね。分かります」
なんか勝手に分かられてる!?
「しかし、なぜ清澄さんが僕にこんな話をしたのか解せません」
私にも解せないんですけどっ!?
「なんにしても、僕から何らかの介入をするようなことはしませんし、誰かにこの話をするつもりもありませんので安心して……あれ？　佐々岡さん？」
後半の先生の言葉はほとんど耳に入ってこなかった。
私はただ拳を握りしめて、肩を震わせながら叫ぶ。
「しぃーをぉーりぃーーーーーっ!!」
全力ダッシュ。
身体が思うように動かなかったことが嘘のように、怒りで全身が跳ねるように動く。

陸上部時代最盛期のときと同じ、や、それ以上のスピードでもって家庭科室を飛び出し、栞のクラスを目指して走る。廊下を駆け抜け、階段を駆け上がり、駆け上がり、また廊下を疾走する。

と、栞がちょうど教室に入っていくのが見えた。

「しいーをおおーりいいいーーーーーっっ!!」

お腹の底から出した、さっきよりも怨念を込めた声で叫びながら、栞に突っ込んでいく。

当然、「ボケとツッコミ」の「ツッコミ」の方ではない。

闘牛士に襲いかかる闘牛の如く、栞に突っ込んで行く。

「あにゅ？」

私に気づいた栞は、へんちくりんなワードを口にしながら、こちらに身体を向ける。

その瞬間、私は彼女の両肩をがっしりと掴んで、走ってきた勢いそのまま廊下の隅まで押していく。

ドン、と廊下の隅の壁に栞の背中が当たったところで、私たちは止まった。

それまでの間、栞の足が床から数センチ浮いていた気がする。

どんだけ軽いんだこいつは。

「あはははっ。朝から楽しげだねー？」

本当に楽しそうな顔で、陽気な笑い声を上げる栞。
私を遊園地のアトラクションか何かと勘違いしているんじゃないだろうか。
「こっちは全然楽しくないっつーの！　あんた、森広先生になんつーことを吹き込んでくれてるのよ！」
「うん？　私は客観的事実を淡々と告げただけで、何も間違ったことは言ってないと思うけどなぁ」
「あってるとか間違ってるとか、そういう問題じゃないの！」
「うーん？」
じゃあどういう問題？　と言わんばかりの顔で小首を傾げる栞。
まったく、まったくこいつは！
「まあまあ、そんな怒った顔しないで」
「誰が怒らせてるんだ」
「気づいてなかったのは森広先生と高浜君本人くらいなもので、他のクラスメイトはほぼ全員気づいてることだと思うけど？」
「え……!?」
思いもよらない言葉に、思わず呼吸が止まる。

「にゃはは。気づかれてないとでも思ってたの？」
「そ、そんな――」
――はずはない、とは言えなかった。
自分ではその気持ちを抑え込んでいたつもりだった。隠しているつもりだった。
でも、考えてみれば私は、演技が、自分を偽るのが、ほとほと下手なのだった。
「まあまあ、そう落ち込まないで。そこがあなたのいいところでもあるんだからさ」
にぱっと笑うと、栞は私と壁の間からスルリと抜ける。そして、その笑顔のまま、さらっと言う。
「それから私、バスケ部の武部君と付き合うことにしたから」
「へえ……って、はぁっ!?」
は？　いまこいつ何と――？　武部君って、あの栞のこと好きだとか言って来栖キャプテンに相談したりしてたあの？　それならまあ話は分からなくも……いやいやいやいや、分からないって！　大体、栞、キャプテンからそのことを聞いて、断ってたんじゃなかったっけ？　よく知らないからとかなんとか――。それに、実は栞はこれまでにも数人の男子から告白されていたけど、全部断ってたじゃないか。っていうか栞に告白するとか、ロリコンだロリコン！　そうか、武部君もか。武部君もなのかっ。男はみんなロリコンなの

かっ！
唐突な栞のカミングアウトに頭の中がぐちゃぐちゃになる。
「――というのは半分冗談で」
「は？　あ、ああ、冗談ね。冗談。そうだよね。あはははは。……って、半分？」
「そ。半分」
そう言って、栞は自分のスカートのポケットから真っ白の携帯電話を取り出す。
……そう、栞はケータイまで白なのだ。というか、元は別の色だったケータイを自分で白くしたようだ。そのうち学校指定の紺色のローファーまで白く塗りだすんじゃないかと気が気でない。
「武部君から告白されたんだけどね、いや、流石によく知らない人と安易に付き合いたくはないから、とりあえずお友達からってことで、ケータイの番号とアドレスの交換をしたのよ」
「そ、そう……」
まあ、その程度のことならこれまでにも似たようなことが何度か――。
「ただし、武部君に教えたのは私のケータイの番号とアドレスじゃなくて、美月の番号とアドレスだけどね」

「ないよ!!」
これまでにこんなこと一度たりともなかったよ！　あってたまるものか！
「なにさ！　何がしたいのさ、栞はっ！」
「これで、夜な夜な美月のケータイに武部君から愛のメールが来るように――」
「なってたまるかっ！」
「あはははっ。冗談、冗談。流石にこれは百パーセント冗談だよ。ははははっ」
お腹を抱えながら笑う栞。
そんなに私の反応が面白かったのか。
「こんにゃろ！」
なんだかムカついたから、栞の頭を掴んで髪をぐしゃぐしゃにしてやろうと思い、手をブンと振り下ろす。が――。
「ははははっ」
笑いながらも栞はスッと私の手を避けた。
「む……」
もう一度、今度は反対の手を、さっきよりも少し速く振り下ろす。
「おっと」

……また避けられた。
「……このっ」
「あはっ」
また――。
「このっ。このっ。このっ！」
「ほっ。ほっ。ほっ」
栞の頭を狙い、左右の手を交互に振り下ろしたが、ことごとく躱（かわ）された。ピコピコと、まるでモグラ叩きのよう――。
「くっ……」
「まだまだ甘いねー。っと、そろそろホームルーム始まっちゃうから教室戻らないとだよ」
栞は私のすぐ横を通り過ぎて、スタスタと自分の教室の方へ歩いて行く。
「あ、うん……」
少し遅れて私も彼女の後ろを追おうとする。と――。
「――とりあえず、安心したよ」
言って、栞はスタっと歩みを止めた。
そして、クルリとこちらに振り返ると、いつになく楽しそうな顔で――。

「まだまだちゃんと動けるみたいだね。じゃあ、明日の球技大会、全力でいかせてもらうよ♪」

まったく。たとえどんな状況であっても、手を抜く気など全くないくせに――。

◇

眠りの中。

それは夢のようであって夢ではなかった。

夢でないことは、すぐに分かった。

それは、あまりにも鮮明で、どこまでも鮮烈で、圧倒的に明確な、私の過去の記憶だった。

思えば、とても平凡で、つまらなくて、幸せな幼少時代だった。

――生まれつき私は心臓が弱く、ちょっとした運動すら困難だった。できて、ちょっとした小走り程度。全力疾走なんてできるはずもなかった。少しでも激しく身体を動かすと、たちまち胸が苦しくなって、立っていられなくなってしまうのだった。

ただ、それ以外は、至って普通だった。普通に小学校に通い、普通に授業を受け、普通

に友達と談笑する。どうでもいいことだけれど、女子の間で占いが流行っていた。よく覚えていないけれど、三つのサイコロを使う占いだった気がする。あと、ときどき男子に混ざって特殊な鉛筆を転がして戦う遊びもしていたような……。

まあ、そんなこと今となっては本当にどうでもいいことだ。だけれど、当時の私はそれで楽しかった。それで幸せだった。何か特別なことが起こるわけでもない、ただの日常が。

ただ一つ、たった一つの不満を除いて――。

運動ができないということは、当然、体育は全部見学。サッカーもバスケもリレーも跳び箱もマット運動も縄跳びも水泳も――全部、全部。

グラウンドの隅にしゃがみ込んでひとりで眺める、みんなが楽しそうに運動している姿が、羨ましくてしょうがなかった。

あるクラスメイト言った。

「佐々岡さんが羨ましいよ。私、運動すっごく苦手だし、できることなら、佐々岡さんみたいにずっと体育見学してたいな」

その言葉に悪意などなかったのだろう。それどころか、私を気遣った言葉だったのかもしれない。だったとしても。そうだったとしても、私にはその言葉が腹立たしかった。

見学したいのなら、すればいい。仮病でもなんでも使って。あなたには、選択肢がある。

運動することも、しないことも、選ぶことができる。私には、それができない。私には、運動する、という選択肢が存在しないのだ。

それに、そんなことを言っておきながら、あなたは、笑っているじゃないか。体育の授業中、確かに運動神経はいいようには見えないし、何かの試合で活躍しているわけでもないけれど、楽しそうに笑っているじゃないか。

――ムカつく。

そう思うと、胸がズキリと痛んだ。

嫉妬心。

ないものねだり。

そんな思いを、グッと抑えて、私は生きていた。

でも別に運動ができなくても、楽しいことはたくさんあった。

友達とテレビゲームをして遊んだ。トランプをして遊んだ。漫画を読んだ。小説を読んだ。歩くことはできるのだから、家族旅行だってできた。

そう。私は幸せだったのだ。

小学校六年生の夏までは――。

きっかけは些細なことだった。いや、きっかけですらなかったのかもしれない。

その夏一番の暑さの日だった。
身体が熱くて、意識がふらふらとしていた。
ちょっとした脱水症状だと思った。
家族も、私自身も。
ところが、病院で点滴を打って安静にしていても、全然良くならなかった。良くなるどころか、悪化していった。
大きな病院に運ばれ、精密検査を受けて、そのまま入院することになった。
どうやら私の心臓が悪い状態になってしまったらしかった。
手術をすればどうにかなるといったものでもないようで、ひたすらベッドの上で点滴の日々だった。
初めのうちは車椅子で移動するくらいのことはできた。
でも、数ヵ月後にはそれさえする元気もなくなり、寝たきりになってしまった。よくお見舞いに来てくれていた友達も次第に来てくれる頻度が減っていった――。
思った。
たかが運動できないことがなんだったんだろう、と。
私はなんてくだらないことで嫉妬して、腹を立てていたんだろう、と。

私は失った。
運動はできなくても、楽しいことがたくさんあった日々を――。
幸せだった日常を――。
それから私の症状は、少しずつ、本当に少しずつ悪化していった。
じわり、じわり、と私を追い詰めるように――。

◇

ある程度予想はしていた。
それなりの覚悟もしていた。
でも、だからといって、このタイミングはないだろう。
なんだろう。悪意があるのではないかとさえ思ってしまう。
それほどに、絶妙なタイミングだった。
それほどに、残酷なタイミングだった。
「どうしたんですか？　佐々岡さん。まさか、分からない、なんてことはないですよね？」

眼鏡を右手の中指でスッと直しながら、数学の先生らしき男性が私を見据えている。

「うぐぐ……」

いくら記憶が全部戻ったとはいえ、私の知識は数学どころか小六の算数レベルで止まっているのだ。その知識でいきなり高校二年生の数学の授業についていけるわけがない。もう頭の中はクエスチョンマークだらけだ。

いま私が解くようにと先生に言われた問題をもう一度見てみるが、これがどうにも意味不明でならない。なぜエックスが出てきているのか。いや、エックスくらいならまだいい。そのエックスの右上についている小さい2はなんだろうか。印刷ミス？　嫌がらせ？　いやいや、それらは読めるだけまだマシだ。最大の問題はコレ。式の一番左にある「∫」という謎の記号。もはやどう読むのかすら分からない。何かの呪文の一部に使われていそうな記号である。

とまあ、こんな状況に陥る直前に私は目覚めたわけだから、逆に言えば、その直前に佳苗は眠りに就いたということだ。

――いや、彼女に悪気はないはず……たぶん、恐らく、きっと。

こんなことなら、彼女の「日常の記録」だけでなく「授業の記録」、すなわち授業用のノートも読んでおくんだった。……読んだところで、一晩でここまで追いつけるわけなど

ないのだけれど。
「2エックス3乗マイナスエックス」
「ほへ……？」
右隣の席から小さな声が聞こえて、思わず妙な声を出してしまった。
「ん？　どうしたんですか？　やっと答えが分かったんですか？」
「あ、ええと……」
どうやら、先生には今の隣の人の声は聞こえなかったようだ。席が後ろの方でよかった。
そして今のはきっと答えを教えてくれたんだ。
そう信じて、私は同じことを口にする。
「2エックス3乗マイナスエックス……です」
「はい、正解です。いや、よかったよかった。佐々岡さんの数学力が急低下したのかと不安になりましたよ。ははは」
先生は笑いながら黒板に向かって、私が言った答えを書いていく。
ごめんなさい。急低下どころか、地面まで垂直落下してます。佐々岡美月の数学力……。
それはそうと、さっき隣から聞こえた声に、なぜか聞き覚えがあったんだけど。
そう思い、チラッと右隣を見て、思わず「あっ」と声を出しそうになって、どうにか堪(こら)

えた。
そこには、現在このクラスの男子で唯一顔と名前が一致してる人――高浜祐樹君が座っていた。

◇

さて、困った。
色々と考えたいことがあった。
記憶が戻ったことで、思っていたほど何かが劇的に変わったわけではなかった。記憶が戻っても、結局私は私のまま。ただ、私が私であること、私が佐々岡美月であることに強い確信と自信が持てるようになった。ただそれだけのこと――。
とはいえ、全く何も変わらないということはない。
むしろ、これから色々なことが変わっていくことになるんだろう。
そして、どう変わっていくかは私次第なところが大きい。
だから、これからどうしていくかを本気で考えなくてはいけない。
考えるべきことは、たくさんある。

だというのに……。
「じーーーーー」
見られてる。
「じーーーーー」
なんか見られてるよっ!?
「あの……高浜君、なんでそんなに見てるの？」
私の机を挟んで、ちょうど正面に座って、わざとらしく「じーー」とか口で言いながらずっとこちらを見ている高浜君に話しかける。
「いや、だってほら、『ちゃんと見てろ』って言われたから」
「そういう意味じゃないと思うよ！」
なぜこんな状況になっているのか。理解が追いつかない。
別に目が覚めたら既にこんな状態になっていたというわけではない。私はあの数学の時間からずっと起きていたし、周りで何が起こっていたかもちゃんと見ていた。
ただ、ほんの数分のうちにこの状況になってしまったものだから、頭の方が状況変化についてこれなかった。
だから、改めて何がどうなってこんなことになっているのかを整理することにする。

――ことが起こったのは本当に数分前のこと、かろうじて五分経ったかどうかといったところだ。

「それでは、今日の授業はここで終了します」

数学の先生がそう言い終わった直後、見計らったように授業終了のチャイムが鳴った。それは同時に昼休み開始のチャイムでもあった。

そして、教室内が一気に騒がしくなる。

ただ、どういうわけか、その騒がしさは、私の知っている休み時間特有の無秩序な騒がしさではなく、ある種の統率が取れた騒がしさのように感じた。その騒がしさは、同じ目的を持っているようだった。その騒がしさは同じ方向を目指しているようだった。例えるなら、みんなで一匹の獲物を集団で仕留めにかかっているような――。

そしてみるみるうちにその喧騒は私に向かって押し寄せてきた。

え？　私が獲物？　などと考える余裕もないうちに、私は大量のクラスメイト――その大半が女子だったけど、男子も数人混じっていたようだった――に囲まれた。

「やあ、ミツキン。元気か？」

私を囲んだ女子集団の中でも前の方にいた人が話しかけてきた。

なにやら変なあだ名で呼ばれた気がする。

茶髪のショートカット。若干つり目。そして変なあだ名。
ああ、この人が『ノリと言葉の響きだけで人にあだ名をつける女』空閑晴河さんか。
「ま、まあまま元気、だけど……？」
私は初対面の相手に、少し戸惑いながら返事をする。
「そうかー、それは残念だなぁ」
と、今度は空閑さんの隣にいた、黒のミディアムストレートヘアで若干細め体型の女子が話しかけてくる。しかも、残念、などと言いながら、顔は嬉しそうだ。満面の笑みだ。
「『まあまあ』ってことは万全ってことではないんでしょ？　明日の試合に向けて体調は万全にしといた方がいいよねっ」
「ちょっと待て、リョウ！　ここはアタシが説明するって約束だっただろ」
リョウ？
ああ。ということは、こっちの人は岡島涼香、通称「リョウちゃん」か。
確かこの二人はバスケ部だったはずだ。
「別にいいじゃない。誰が言っても同じことなんだし。それに、そんな約束をした覚えはない」
「なに!?　覚えがないだと？　一夜限りの過ち(あやま)だったと!?　酒に酔った勢いだったとっ!?」

「どうしてそういう発想になるのさっ！　酒なんて飲んでないし！」
「乙女の純情を踏みにじりやがって！　もうアタシ、お婿（むこ）に行けない！」
「人聞きの悪いことをっ！　ってか、女か男かはっきりしろっ」
「どう見ても女だろ!?」
「いや、全体的に男っぽいし」
「なっ!?　誰がナイチチだっ」
なんかよく分からないうちに謎の漫才が始まっている。
「あー、ダメだ。この二人じゃ話しが進まない。私が話を――」
横から、特徴的な短めのサイドポニーの女子が割り込んでくる。身長は低めだ。
まあ、このクラスでサイドポニーってことは――。
「「ミッチーは黙ってて！」」
空閑さんとリョウちゃんの声が見事にシンクロした。
ともかく、今割り込んできたのはミッチーこと相沢美智子（あいざわみちこ）。陸上部で種目は長距離……だったはず。
「なにをぅっ」
と、ミッチーが空閑さんたちに向き直る。

「――要するに、私たちは練習に行きますけど、美月さんは昨日の今日ですから、ここでゆっくり休んでいてください、ということを言いに来たんですよ」

このタイミングで割り込まれたっ!? のようなことを、空閑さん、リョウちゃん、ミッチーの三人が同時に言ったようだったけど、今度は三人が同じようで違う台詞だったから、それぞれが何と言ったのか正確にはわからなかった。

「ナイス千恵ちゃん」

そう言いながら、最後に割り込んできた千恵ちゃんの頭をワシワシと撫でているのは……

……観察するに、たぶん鈴村朱莉だ。百七十センチ近くはありそうなスラッとした長身。ただでさえ背が高いのに、凄くいい姿勢で立っているから、余計に長身に見える。

そんな朱莉に、えへへー、と言いながら、飼い主に頭を撫でられている猫のような顔をしている千恵ちゃんは逆に女子の中でも背が低い方だから、朱莉と千恵ちゃんそれぞれの高さと低さが強調されている。

と、いうか、この二人、こんなに仲が良かったのか。佳苗の日記からはそんな情報は読み取れなかったのだけど……。もしかしたら、バスケの練習から逃げようとしていた組(ぐみ)として、この数日で友情が芽生えたのかもしれない。

だとしたら、なんというか……嬉しい。

「あと付け加えると、今日は男子と合同練習するから、クラスみんなで練習行く」
「おおっ!?　その説明まで取られた！　しかもスズリーにっ」
と、謎の驚きを見せる空閑さん。
「スズリーって、もしかしなくても、私のことだよね……」
なんか、墨が磨れそうなあだ名だ。
そんなあだ名を付けられ、不服そうな顔をする朱莉に対して得意げな顔で空閑さんが答える。
「おう。『すずむらあかり』だからな。最初と最後を取ってスズリーだ。カッコいいだろ」
「微妙」
凄く細い目をして答える朱莉。
「微妙とか言うなっ！　まあいい。一番大切な話が残っているからな。では、その話をアタシが――」
「ちなみに、全員で行ってしまうと佐々岡が独りになってしまって可愛そうだから、コイツを置いていくことにする」
後ろの方から私の周りの人たちを掻き分けるようにして、クラス一でかい男子が、高浜君を摘(つま)んで持ってきた。そして、私の前の席の椅子を私の方に向くように回転させると、

高浜君をそこにドサリと置いた。
「あの……俺、そんな話聞いてな――」
「というわけだから、高浜君、美月のことちゃんと見ててねー。じゃあ、私たちは行こうかー」
ミッチーのその言葉をきっかけに、全員がぞろぞろと教室から出て行った。
私と高浜君と、空閑さんを残して。
空閑さんが悲しそうな顔をして言う。
「……なあ、ミツキン。これは集団イジメじゃないだろうか？」
「いや、そんなことはないと思うけど……」
「アタシだって、ミツキンに何か説明したかったのに！　みんなの馬鹿ーっ！　今日はアタシ遅刻しなかったのにー!!」
最後は関係があるんだかないんだか……いや、高確率で関係ない台詞を叫びながら彼女は教室を飛び出して行った。
――そして、私と高浜君の二人だけになった。
「……なあ、ミツキン。これは集団イジメじゃないだろうか？」
高浜君が空閑さんと全く同じことを私に聞いてきた。

「いや、そんなことは……」
こちらは否定しきれないものがあった。
「――で、君は誰なんだ？」
「え……!?」
唐突に発せられた、高浜君の鋭い言葉と視線に私の思考が止まった。
「よくよく考えてみれば、俺達、何度か会ってるよな？」
自分の記憶を探るように、眉間のあたりに右手の人差し指を当てて考えながら言う。
「少なくとも、これまでに二回は会ってるな。確か両方とも、会ったのは家のそばの川原だったか――」
「……」
「なーんて、カッコつけたこと言ってるけど、気づいたのはついさっきなんだけどね」
彼はおどけるように、表情を崩して言う。
「さて、そろそろ答えてほしいんだけど。君は美月じゃないだろ？」
「いや、私は……」
何か答えなくちゃ、と思って口を開いたけど、その先が続かない。
何をどう説明すればいいんだろうか？

そもそも、説明していいのだろうか？
高浜君に気づかれてしまったという事実が、なぜか私の胸をギュッと締め付ける。
昨日、栞に事実を突きつけられたときだって、ここまで苦しい感覚はなかったのに。
だいたい、彼女がすべてを知っているのは仕方がないことだとして、高浜君にはどうして気づかれてしまったのか？
いや、逆だよ。逆。
どうして今の今まで彼は気づいてくれなかったのか。
だってそうでしょ。彼は一度「美月（かなえ）」に告白してるんだよ!?
今はどうだか知らないけど、自分が好きになった人の中身が本人かどうかなんて、普通最初に会ったときに気づくでしょ。それが無理でも二回目には気づこうよ。ついでに、昨日の放課後にも一回ここで会ってるよ！　それには気づかなかったの!?
「――ホント、鈍感……」
「え？」
「鈍感って言ったのよ!!　まったく……」
大きな声を出したら、まあ、少しすっきりした。
彼は驚いたような、困ったような顔をしているけど。

――ああ、そうか、彼のさっきの質問にはまだ一切答えてなかった。
「うん。確かに私はあなたが知ってる『美月』じゃない」
もう、迷いはなかった。
「でも、それは半分間違い。本当は――」
きっと佳苗は望んでいないだろうけど、でも、やっぱり、どうしたって――。
「私が『美月』で、あなたが知っている方は『佳苗』って娘なんだ」

◇

――ああ、私はなんて自分勝手だったんだろう。
そんな自己嫌悪に私は沈んでいた。
今日一日、いや、半日くらいだった。まあともかく、それだけの時間を学校で過ごして、ようやく気づいた。どうして今まで気づかなかったのか。佳苗の「記録」を読んで気づくことだってできたはずなのに。
クラスメイト全員が私に優しかった。
それは、クラスメイト全員が佳苗に優しいということ。クラスメイト全員と佳苗が仲良

しだということ。
朱莉や千恵ちゃんのように、最近仲良くなった娘もいるけれど、佳苗はこんなに多くの人と仲良くなっている。
私に同じことができるかと問われたら、答えは確実に「ノー」だ。私は引っ込み思案だし、佳苗ほど他人に気配りができるわけでもない。現に、私の記憶の中で、こんなに多くの友達がいた時期など一度もなかった。
それに、なにより、佳苗はあの超人真っ白娘の人生を変えてしまっている。佳苗はそれだけ凄い人なのだ。
そんな佳苗が、私のために多くの時間を使い、私のために多くの苦労をして、そして、私のために何の躊躇(ちゅうちょ)もなく消えていこうとしている。「何の躊躇もなく」は私の勝手な考えだけど、そんな気がしてならない。
本当にそれでいいのだろうか？
確かに心臓以外はすべて私の身体なのだけれど、だからといって、そんなことは私の中の佳苗の存在が消えていい理由にはならない。だというのに、私は彼女が消えていくことが自然なことのように、当然のことのように、今朝メモを残してしまった。
――今まで本当に色々ありがとう。

――だから、それまで、私が記憶を取り戻すまで、あとちょっとだけあなたに任せてもいいですか？

なんて身勝手なことを書いているんだろうか、私は。

それに対して――。

「もちろん！」

私のそのメモの下に書かれた、私のとは違う特徴を持った文字。こんなにも短い文なのに、たった一言なのに、思いやりと慈しみに満ちているように感じる。これが「佳苗」なんだろうな、と思う。

――私はすでに一度彼女を裏切っている。だから、まあ、「だから」というのもおかしな話なのだけど、もう徹底的に彼女を裏切ってやろうと思う。まあ、「裏切る」といっても、悪いことをするのではなく、私が彼女にとって良いことだと思えることをするだけ。

彼女の期待を裏切る。

彼女の希望を裏切る。

つまり、彼女が思っている通りにはさせない、ということ。

まあ、彼女にとっては悪いことかもしれないけれど、もしそれをやらなかったら、私の気が済まない。絶対に後悔する。この先ずっと。だから、やるしかないんだ。

まず、手始めにやるべきことは――。
考える。ひたすらに思考を巡らせる。
私の得意分野だ。なにせ、身体がまともに動かない間は、これが私のできる唯一のことだったのだから。
考える。ただ、それだけ。でもそれは、単純な、純粋な、一般的な思考ではない。
思考は、その方向性を明確に定めながらも、分散させ、迂回させ、並行させ、時にはグルリと回転させる。
様々な感情を織り交ぜる。幾つもの想いを、自分のモノかも他人のモノかも分からないままに、積み上げては崩して、散乱させてはまた積み上げる。
一直線の思考よりも、実はこの方が、ゴールに辿り着くのが断然早かったりする。
急がば回れ、というやつだろうか。
――ほら、もうやるべきことが見えてきた。
見えたら、行動。
私は意気揚々とケータイを取り出して……固まった。
「操作方法、わからない……」

かなえ　は　こんらん　していて。という表現がこれほどしっくりくる状況は私の人生においてきっと初めてだった。混乱しすぎて「い」と「て」が入れ替わってしまったほどだ。世にも奇妙な物語でもなかなか無い状況だ。や、そもそも私の意識が美月の中にあること自体が既に世にも奇妙な物語すぎる。奇妙すぎて困るくらいだ。逆に困りすぎて奇妙だ。

◆

……もはや自分でも考えてることがよく分からない。

おかしくなりすぎだ、私。

あー、なんか混乱しすぎて逆に冷静になってきた。

それに、落ち着いてみれば、それほど大したことでもない。

確か、私が寝てしまったのは数学の授業中で、そして、いま目が覚めたら、夜の川原だったというだけ。普通の人間でこんなことが起こったらそれは一大事――や、大惨事かもしれないけど。

「さて――」

私はグーッと伸びをしながら辺りを見渡す。

周りは暗く、澄んだ、静かな月の光が、小川に反射している。少し遠くを見ると、眠りについた住宅街から街灯の人工的な白い光がぼやっと漏れ出ている。

ここは家の近くの川原だろう。それはすぐに分かった。ただ問題は、なぜこんなところにいるのか、ということ。私は……や、私じゃないか……。

「美月、あなたは、こんなところで何をしていたの？」

小さな声で問いかけるように言ってみたけど、当然、返ってくる言葉はなく、静寂が辺りを包んでいる。小川の流れる小さな音も、その流れ自体も、この静寂に飲み込まれてしまっているよう。

静寂と静止。

私がいるこの場所だけが、世界から切り離されているように感じる。

音の無い世界。止まった世界。

ただ、ゆらゆらと動く水面（みなも）の月だけが、この世界が止まってはいないことを教えてくれる。

暗く濃い藍色に染められた水面に浮かぶ、明るく薄い黄色の月。

私は、吸い寄せられるように、川の流れに近づいて行く。

「――――っ!?」

歩いている途中で、グラっと身体がブレて、倒れそうになるのを必死に踏み止まった。

――全身の感覚がさらに薄まっている。

そういえば、目を覚ましたときに座っていたけど、そこから立ち上がるだけでもかなりの苦労を強いられた気がする。そのときは、急に変な場所にワープしてしまった気分だったから、驚きの方が勝っていて、そっちにはそれほど意識がいっていなかったのだろう。でも、今こうして歩いてみると、恐ろしいほどに感覚が薄くなっているのを感じる。麺つゆに例えるなら、今朝の段階では十倍に薄めてご利用されていたのが、今は百倍に薄めてご利用されているような状況だ。薄まりすぎてもはや元がなんだったのかわからないくらいだ。

まったく、酷いものだ。

そう思いながら、水際にしゃがみ込んで、水の中にゆっくりと指を入れた。

――ああ、これは本当にひどい。

冬の川の流れの中に指なんて入れたら、普通は冷たく感じないはずがない。や、普通は「冷たい」では済まされない。冷たさを通り越して、痛みや痺れを感じるはずだ。なのに、私の薄まった感覚では、ほんの僅かにヒヤッとした感覚があるような気がするだけ。まるで分厚い革手袋でもしているかのよう。

「……」
ああ、そうか。私はもう二度と、この水の冷たさも、北風の寒さも、ストーブや布団の暖かさも、普通に感じることはできないのか……。
そう思うと、無性に悲しくなって、視界が滲んだ。
「――――っ」
グッと堪える。
だめだよ。こんなことで――。
当たり前のことが、当たり前になるだけ、なんだから。
「おーい。ずっとそんなことしてると凍傷になるぞ」
「あはは。そうだよねー。……って、高浜君!?」
今の感覚では信じられないほどのスピードで、私は立ち上がって振り返る。
「まったくお前は……。ほら、ちょっと手貸して」
言いながら、私の両手を強引に引き寄せて、ハンカチでぐりぐりと無造作に水滴を拭(ぬぐ)ってくれる。目で見てそうされていることは分かるのに、そうされているという感覚はほとんどないから不思議なものだ――。
などと考えていると、拭き終えたハンカチをズボンのポケットにしまった彼が、両手で

私の両手をギュッと握ってきた。
「な、なにを――!?」
「つたく、氷みたいに冷たくなってるじゃないか。何やってるんだよ、この前といい、今といいさ」
「……この前？」
なんのことだろう、と私が首を傾げていると――。
「ああ、そうか。そういうことか」
高浜君は何やら真剣な顔をして頷きながら、何かに納得している。
より一層さっぱりだ。
「お前まで何でこんなことしてんだよ、佳苗」
「うーんとねぇ……って、ええっ!?」
あれ？　聞き間違い？
今、高浜君、私のこと、「佳苗」って――。
「まあ、そう驚くなって。本当のこと聞いちゃたんだよ。……色々とね」
「本当のことって……。まさか、栞!?」
だとしたら、たとえ栞だとしても許さな――。

「いや、美月さんから」
「……えっ？　なに……それ……。嘘でしょ？　美月が、そんな――」
思考が一瞬で混乱状態になる。
「嘘じゃないよ。美月さんから聞いたんだ。初めは、そんな話信じられなかったし、受け入れることもできなかった」
そりゃそうでしょ。だいたい、今の私が、信じられてないし、受け入れることもできてないよ！　対象は違うけども。
「でも、その話聞いてから、ずっと考えて、ずっと悩んで、一つ分かったことがあった」
いやいや、美月さん。なにぶっちゃけちゃってるんですか!?　しかも高浜君相手に。や、高浜君だからどうとかじゃなくてさ。もし話すにしても、タイミングとか、手順とか色々と――。
「――俺、やっぱ佳苗のことが好きだ」
「……ほ、あ？」
お、や……。高浜君が今なにやらオカシナコトヲイッテイタヨウナ……。
「あの……い、いま……ナニカ、オッシャイマシタカ？」
「なんだ聞いてなかったのか？　しっかりしてくれよ。っーか、結構前に一度同じような

こと言っただろ。俺は佳苗のことが好きだ、って。いや、まあ、あのときは「美月」って呼んでたけど、さすがに知らなかったんだからそこは勘弁してくれ」

確かに、私は彼から高一の最後に一度、好きだ、と告白されている。

「でも、それは、ちゃんとことわ――」

「なんか、中途半端な、変な返事しかもらってないんだよな。『私はそういうの無理だから』だったっけか」

「う、ぐ……」

ちゃんと断れてなかった……。

「だから、今ここで、ちゃんとした返事が欲しいと思ってさ」

凄く近くで、正面からまっすぐに、どこまでも真剣な目で見つめられる。

「……」

「……」

暫しの沈黙。

次に言葉を発さないきゃいけないのは私だ。でも、何と言っていいのか分からない。だって、私はきっともうすぐ消えてしまう。果たしてそのことも彼は知っているのだろうか。知っていて、こんなことを言っているのだろうか。だとしたら、なんて――。

「――月が綺麗だね」
私は彼に背を向けて、空を見上げる。
雲ひとつない、乾いた空気に磨き上げられたように澄んだ夜空には、真ん丸の月が薄い黄色の光を放っている。
「……ああ」
彼は少し小さい声で、それだけ口にして、また黙った。
「美月、か……。いい名前だよね」
「……」
「ほら、水面にも月が綺麗に映ってる。あんなに遠くにある月が、こんなに近くに――。でも、それは水の動きに合わせてユラユラと歪んだり崩れたりして……こんなにも儚い。そう、どんなに本物の月と同じように見えても、結局は偽者。まったく違うものなんだよ。――私はずっと美月のフリをし続けてきた。美月であろうとした。でも、全然、ダメダメだった。あの水面の月の方が、よっぽど優秀だよ。本物の月が欠ければ、あの月も同じように欠けるし、満ちれば同じように満ちる。私は、美月のために、なんて言いながら、結局は自分がしたいことをしていただけ。それを言い訳にして、好き勝手に――。美月のためどころか、逆に迷惑だったんじゃないかな……。ホント、つくづく、バカだな、私……」

「――ホント、つくづく、お人よしだよ、お前は」
「え……!?」
耳元で高浜君の声が聞こえて、振り返ろうと思ったけど、身体が動かなかった。や、動かせなかった。だって、いつの間にか、彼に後ろから抱きしめられているんだから。
そんな重大なことにすら気づけないほどに私の感覚は薄くなっているのか……。
「だって、美月さんのために、美月さんのことを想って、泣けるんだから」
「……」
ああ、そうか。なんか視界が滲んでいると思ってたけど、私、泣いてるんだ。
「もしかしたら、もうすぐ自分自身が消えてしまうかもしれないってときに、それよりも美月さんのことを考えてあげられてるんだから」
ああ、やっぱり知ってたんだ。
知っていながら――。
「だから、そんな佳苗だから、俺は好きになったんだと思う」
――なんて、イジワルなんだろう。
「それに、佳苗は佳苗だ。美月さんとは違う。違って当然。水でもなければ鏡でもないんだから。それなのに自分を隠して生きるってのは、凄く辛いことだと思う。なのに、佳苗

はこんなにも長い間頑張った。美月さんを想って――。それを『迷惑』だなんて、思うわけないだろ。感謝してるに決まってる」

「……そっかな。うん。それなら、良かった」

心が、スッと軽くなったような、そんな気がする。

それと同時に、彼に抱きしめられているという現実からくる気恥ずかしさと動揺に襲われる。

「……」

「……」

短い沈黙が、やけに長く感じる。ほんの数秒が数分にも数十分にも――。

もっと感覚があったら――彼に抱きしめられていることをもっと強く感じられたら――もっと長い時間に感じたのだろうか。もっと動揺してしまっていたのだろうか。だとしたら、感覚が薄くなっていて良かった。だって、私はこれ以上、彼のことを好きになっちゃいけないんだから。

「――――っ!?」

唐突に、彼は私の身体をグルリと半回転させて、両肩をガシッと掴んできた。

要するに、いま物凄い近い位置で私たちは対面している。

「……」
「……」
そしてまた、短くて、長い沈黙。
「何度も言うけど、俺は佳苗のことが好きだ。だから、佳苗の素直な気持ちを聞かせてほしいんだ」
「――――」
ああ、もう！
そんな真剣な顔で見つめられたら――。
でも、それでも私は――。
「ありがとう。気持ちは凄く嬉しいよ。でも、ゴメン……最後まで自分の意地を通したいんだ。もしここで折れたら、今までの自分を全部否定しちゃうみたいで、嫌なんだ。ワガママだけど、本当にゴメン」
彼の目を真っ直ぐに見て、そう言った。
「……」
しばらく彼は無言で私を見つめ続けてから、「そっか」と小さく呟いて私を放した。
「ホント強情だよな。でも、そんなとこも含めて好きになっちゃったんだから仕方ないか」

「……っ」
私は恥ずかしさのあまり、顔をそらしてしまった。
よく臆面もなくそんなことを言えるものだ。
「でも、世の中にはおまえよりも、もっとワガママで、もっと頑固なやつもいるから、気をつけろよ」
「え……。それって、どういう――？」
「さあな……。なんか、そんな気がするだけだ」
彼はそれだけ言うと、黙って空を見上げた。
その黒い瞳の中には、明るく丸い月が、とても綺麗に映り込んでいた。

◇ 5 ◆

きっと、終わりでもなく、始まりでもなく、ただずっと続いていくだけなんだ。

◆

『ゴメンね。午前中のドッジボールは私が楽しんじゃった。でも、午後のバスケは佳苗が楽しんで』

――や、むしろドッジボールをやってくれて助かったくらいだよ。

そう思いながら、美月のそのメモを握り締めて、私は体育館に向かって歩く。

コンディションは最高だ。

最高に、悪い。

もはや歩いている感覚すらない。

これは夢だ、と言われたら簡単に納得できてしまいそうなほどに――。

頼れるのは感覚ではなく、自分の経験、勘、慣れ、条件反射。

身体は動かせる。

動かせるのなら、感じなくても、歩けるし、走れる。
目は見える。
見えるなのら、感じなくても、ドリブルもパスも、シュートだってできる。
バスケができる。
別にそれほどバスケが大好きというわけではないけど、楽しいじゃない？
大好きなクラスメイトのみんなと一緒に試合をして、あの栞に一泡ふかせる。そう考えただけで、どうしようもなく楽しくなる。
私にとっては、きっとこれが最後だ。でも、悲しくなったり、辛くなったりはしない。してはいけない。だって、私にとって「今」は、バスケの試合のロスタイムみたいなものだから――。
だから、今はただがむしゃらに楽しめばいい。や、私の方から楽しもうとしなくても、勝手に楽しくなってしまう気がする。
「あ、佳苗さん、遅かったじゃないですかー」
と私の姿を見つけた千恵ちゃんが駆け寄ってくる。
「一回戦、始まるわよ、佳苗」
と朱莉が首だけでこっちを向いて言う。

「司令塔がいなかったら話にならないからね」
とミッチー。
「そうそう。一応言い出した責任で、佳苗に司令塔任せるからね」
「頼むぞ。ナエナエ」
リョウちゃんと空閑さん。
「うん――って、ナエナエ言うな！」
あだ名が嫌すぎる。
「ツッコむところはそっちなのか……」
「え……ああっ!?」
「佳苗、気づくの遅すぎ……」
「あの……一番最初に呼んだ私の立場は……」
「はは……はは、あはははっ」
「おおっ!? 佳苗が壊れた」
「わっ、私の所為ですか!?」
「いや、それは違うかと――」
「あはははっ」

まったく、ホント、私が何かしたわけでもないのに、もう、こんなに楽しくなってしまった。

◆

「いやー、正直、その身体（からだ）で決勝まで上がってくるとは思わなかったよー」
どこまでも楽しそうな顔で栞が話しかけてきた。
「ここまでこなきゃ、あんたと試合できないんだから、しょうがないでしょ」
ここまで、栞のクラスは全試合をダブルスコアで勝ってきた。
うちのクラスも、何度か苦戦はしたものの、なんとか決勝まで勝ち進んだ。
まったく、せめて二回戦くらいで彼女のクラスと当たっていれば、こんな苦労はしなかっただろうに。トーナメントで決勝まで当たらないなんて、何かの陰謀か、誰かの嫌がらせなんじゃないかとさえ思う。
まあ、ここまで本気を出さずに勝ち進めたのは、不幸中の幸いといったところか。
「――ところで、『その身体で』ってのは、どっちの意味？」
「んー？　もちろん両方だよ。片方がなかったら、もう片方もありえないわけだからね」

「なるほど。おしゃっる通り――。でも、別に私一人でここまで来たわけじゃない。クラスのみんなが頑張ったからここまで来れたんだよ」
「クラスのみんな、ねー。それを否定するつもりはないけどさ、あなたここまでの二試合、出場時間合計十数分で、一人で33得点してるんだよ。まさか、ここまでやれるとは思ってなかったよー」
「それを言うなら栞なんて、これまで一人で50点以上取ってるでしょ。最初に当たった五組、二十分の試合で70点も点差できて、涙目になってたじゃない。少しは手加減したげなよ」
「私はどんな相手でも、手を抜くつもりはないよ。当然、次の試合もね」
「つたく。ま、私たち相手に手ぇ抜いてたら、確実に勝てないよ。まあ、本気できたところで、勝つのは私たちだけどね」
「うん。それは楽しみ」
栞は満面の笑みでそう言った。
そんな余裕で笑っていられるのも、今のうちだ。
「栞ー、次のスターティングメンバーどうするー？」
八組の女子バスケ部のキャプテンが少し遠くから栞に呼びかけてくる。

栞、女子バスケ部のキャプテンにまで頼られてるらしい。それだけの人望と能力を持っているのだから、当然といえば当然だけど――。

「どうしようかー。一番面白そうなやつでいこうかー？」

――こんなんでいいのか？

いいんだろうなあ……。

「佳苗、うちのスターティングメンバーはどうする？」

と、私と栞のやり取りを後ろで聞いていたリョウちゃんが話しかけてきた。

「任せて。それならもう決めてある」

リョウちゃん、空閑さん、朱莉、ミッチー、そして私だ。

◆

――パンッ！

ジャンプボールでバレーボール部キャプテンと同じ高さまで飛んだ空閑さんのパワーが少しだけ勝って、朱莉にボールが渡る。

ダム、ダム、とゆっくりドリブルを始めた朱莉にソフトボール部のエースがボールを奪

いに近づく。
次の瞬間、朱莉が姿を消した――ように見えただろう、奪いに行った彼女には。
朱莉は一瞬で体勢を限界まで落として、一気に加速していた。
朱莉が今日このスピードを見せるのは初めてなのだ。
そして、うちのクラス以外の人が朱莉のこのスピードを見るのは初めてのはずだ。朱莉と同じ中学校だった人も見たことがあるかもしれないけど、たぶんそれはこの高校では高浜君くらいだから、実質うちのクラス以外の人は初見のはず。
風を切るようにゴール下に駆け込み、唯一そこまで下がっていた一人のディフェンスを躱(かわ)して、美しいレイアップシュート。
パサッとボールがネットを揺らした。
――――。
暫し静まり返る。
そして、観衆の「おおおおおっ!!」という驚きや興奮が入り混じった声で体育館が満たされる。
「え……何、どういうこと？　っていうか、あれ誰よ？」
つぶやきながら、センターライン付近でパスを受け取るソフト部エース。そして、ゆっ

くりとドリブルを始めた直後。
「鈴村朱莉よ」
「えっ？」
彼女が声を出したときには、朱莉にボールを奪われていた。
百七十ほどある身体を極限まで落とした状態で、高速で近づき、床スレスレの位置でボールを掻っ攫ったのだ。
「行かせない！」
朱莉に反応して戻ったというよりは、初めからあまり上がっていなかったバレー部キャプテンがスリーポイントラインの手前で朱莉を止めようとする。
その彼女を、フェイント一つで朱莉が躱した、ように見えたけど、流石はバレー部の反射神経。一瞬で重心を抜かれた側に戻して、体勢を崩しながらも朱莉とゴールの間に割り込んでくる。だけれど、初めから朱莉にはそれ以上前に進むつもりはなかったようだ。
「よっ」
小さな掛け声。
美しいジャンプ。
静かにボールが朱莉の手から離れる。

――パサリと、あまりにも呆気なく、スリーポイントシュートが決まった。
「ええっ!?」
「そんな！」
高校入学以来、運動でも勉強でも、その他のどんな分野でも、大した活躍はしていなかった朱莉のそのプレイに、相手チームも観衆もどよめく。
「このまま一気に引き離すわよ！」
そんな中、朱莉の快活な声が響く。
「もちっ」
「はいっ」
「あいよ」
「おーけー」
全員が返事をして、ディフェンスに臨(のぞ)もうとした、が――。
「あはは。そうはいかにゃいにょ♪　あっと、噛んじゃったー。――てへぺろ☆」
いままでどこに潜んでいたんだろうか、と思わせるほど存在感のなかった栞が突如、存在感をマックスまで引き上げた。この上なくウザい形で――。
体育館の中がさらにどよめく。それもそのはず。『あはは』でドリブルを開始。『そう

はいかにゃいにょ』でリョウちゃんを抜き、『あっと』でミッチーを躱し、『噛んじゃった』でスリーポイントシュートを放ち、『てへぺろ』の瞬間にボールがリングの中に吸い込まれた。

ウザい。際限なくウザイ。

「ヒカリ。全力で鈴村さんを押さえに行って。身長とスピードを考えると、ヒカリが適任だから」

ディフェンスに戻りながら指示を出す栞に「御意！」と答えるバレー部キャプテンことヒカリ。

さすが栞。さっそく朱莉対策を打ってきた。

その直後、朱莉にボールが渡ったが、ヒカリのディフェンスを振り切れない。

でも――。

「リョウ！」

パンッと、朱莉からリョウちゃんへの強烈なパスが通る。

「任せなっ」

と、リョウちゃんは自分についていたソフト部エースを強引に抜きにかかると見せかけて――。

「ナイスパス！」
空閑さんへのパスが通った。
パスを受け取る直前にディフェンスを振り切ってフリーになっていた空閑さんは、余裕でシュートを決めた。
――そう、うちのチームにはバスケ部が二人もいるのだ。朱莉一人を止めたところで何の意味もなさない。
「さえっちー」
今さっき空閑さんに抜かれたカバディ部の紗枝ちゃん――通称さえっち――にスローインを受け取った栞がドリブルしながら近づく。
「――――」
そして、私達には聞こえないように何かをさえっちに耳打ちした。きっと何かの作戦の伝達だろう。
「ではでは、いっくよー」
「いっかせないよー」
さえっちから離れて加速しようとした栞を私が止めにかかる。
強引に右から、と見せかけて左！

と、左に重心を移動させた瞬間、栞はクッと身体を捻って右を抜いて行った。
「なっ……!?」
完全に逆をつかれた。それに身体の反応が遅すぎた。もしあのまま左に来ていたとしても、私の反応速度では、栞の速さについていけなかったはずだ。
ダムダムダム、という低い位置でのドリブル音がピタリと止む。
私が振り返ったときには、止めに入ったミッチーと空閑さんを栞一人で抜いて、シュート体勢に入っていた。
そしてまたスリーポイント。
これで7対6。引き離そうとしても、すぐに追い上げてくる。
「落ち着いて、もういっちょ引き離すよ」
ミッチーからのスローインを受けたリョウちゃんが、そう言ってドリブルを開始する。
「そうはいかないよー」
と、ジリジリとリョウちゃんとの距離を詰めながらプレッシャーをかける栞。
「ぬ……」
半身になってボールを栞から遠い位置でダム、ダム、とスローでつきながら腰を落として、機をうかがうリョウちゃん。

「ふっふっふ」
でも、栞のプレッシャーから逃れられない。あの一切隙のない栞をドリブルで抜くのは至難の業だ。
「空閑っ」
「あいよ」
逆サイドでフリーな状態を作り出した空閑さんにすかさずパスを出した。この視野の広さと判断の早さはさすがバスケ部。
「む……」
すぐにドリブルを始めた空閑さんだったけど、さえっちがピッタリとディフェンスについて行く手を阻む。
――左に、右に、空閑さんが必死に揺さぶりをかけるも、抜けそうな気配はない。
やはりカバディ部は伊達(だて)じゃないってことか！
さすがカバディ！
カバディがどんなスポーツかは知らないけど！
「空閑さん！」
コートの中央やや左を相手ゴールに向かって走りながら朱莉が声をかける。

ブンッ、と空閑さんが手首のスナップの利いた速いパスを朱莉に出す。
「あっ！」と、空閑さんと朱莉が同時に声を上げた。
朱莉のスピードに合わせてもっと前に出せればよかったのだけれど、さえっちのディフェンスの所為で、やや斜め前に出す程度に留まってしまった。それに合わせてスピードを落とさざるを得なくなった朱莉。そしてそこに、待ってました、と言わんばかりの勢いで朱莉の斜め後ろからヒカリが駆け込んできて、パシンッ、とボールをカットされた。
「ナイスインターセプト、ヒカリ」
栞が声をかける。
そして、ヒカリはその声の方向に、振り向くことなくボールを投げる。
「――アンド、ナイスパス！」
「しまっ――」
――『た』まで言い終わる前に、栞はスリーポイントシュートを放った。
そしてまた、当たり前のようにボールはリングの中に吸い込まれる。
7対9。
追い越された。
――それからも、栞たちに翻弄（ほんろう）され続け、開始五分たらずで13対26まで引き離され

てしまった。
「はぁはぁ……」
「ぜぇぜぇ……」
おまけに、リョウちゃんと空閑さん、それにミッチーの息が上がってきた。
それもそのはず。これまでの二試合、この三人はほぼ出づっぱりの状態だったのだ。
この大会の特別ルールで、十分以上連続してコートにはいられないけど、ハーフタイムの後三分休めばまた戻れる。だから、バスケ部のリョウちゃんと空閑さん、そして運動能力の高いミッチーは一試合十七分、二試合で三十四分、この試合のここまでの時間を足すと約四十分コートで走り回っていたのだ。
だけど、ここでリョウちゃんと空閑さんに抜けてもらうわけにはいかない。
一気に追いつき、追い越すためには――。
「リョウちゃん、空閑さん！　まだいける？」
「当然！」
「ハッ、愚問だな。アタシを誰だと思ってやがる！　アタシの名を言ってみろ！」
「いま『空閑さん』って呼ばれたばっかだろうが！」
パンッ、とリョウちゃんのダイビングツッコミが炸裂する。

空元気だとしても、頼もしい限りだ。
「ミッチー」
と、私からミッチーに近づいて、他の人に聞こえないように耳元で話しかける。
「交代してくれる？」
「えっ？　私もまだいけるよ」
「分かってる。でも、ここで追いついておいた方がいいと思うんだ」
「……千恵ちゃんを？」
「うん。できれば、後半でやりたかったんだけど――」
「ハハ。私が某バスケ漫画の『ミッチー』みたいだったらよかったんだけどね。あだ名だけ一緒でもねー」
自嘲気味の笑みを浮かべるミッチー。
「いや、そんなことは――」
得点力はあまりないけれど、そのスピードとスタミナでかなりの貢献をしてくれた。むしろ、ミッチーがいなかったらここまで来れたかどうかも怪しい。それを伝えようと思ったのだけど、彼女は私の言葉を遮(さえぎ)って――。
「なるほどなるほど。主戦力は後半のために温存ってわけね！　任せなさい！」

――周りのみんなに聞こえるくらいの声で言った。
しかも全然わざとらしく聞こえない。
空気読みすぎだ。
「千恵ちゃん、交代」
「は、はひゅ！」
千恵ちゃんの方は、素で変な返事をして、てくてくとコートに出てくる。
会場中からは「おいおい、アイツで大丈夫か？」みたいな声が聞こえてくる。
うん、これでいい。
こうじゃなくちゃいけない。千恵ちゃんの運動音痴は全校に轟くほど有名なのだから。
「千恵ちゃん、やるよ」
私は千恵ちゃんと自然な形ですれ違いながらそう耳打ちする。
「はひっ」
……そこは噛まないで欲しかった。
「さあ、一本いくよー」
リョウちゃんが右手でドリブルしつつ、ビシッと左手の人差し指を立てて、言った。
それを合図とするように、全員の動きが速くなる。

中でも一際速かったのが朱莉。ヒカリにピッタリとマークされていたのを一瞬で振り切って、フリーの状態を作り出した。

すかさずリョウちゃんが朱莉にパスを出す。

――が、それを読んでいたかのように――や、読んでいたんだろう――栞が朱莉の前にスッと現れて立ちはだかる。

キュッ、と朱莉がブレーキをかけた音が響く。

あれだけのスピードを出しておきながら、音もなく出現する栞に反応して止まれるのは、相当な運動神経を持っている証拠だ。そんな朱莉であっても、この試合まだ一度も栞を抜くことはできていない。どんなフェイントをかけようと、どんなスピードで走っても、必ずボールを奪われてしまう。

だけど、今回はこれまでと状況が違う。

千恵ちゃんが完全にフリーなのだ。

朱莉は一瞬栞を抜きに行くフェイントをかけてから、栞が音速でも出さない限り触(さわ)れない角度と速さでボールを千恵ちゃんに投げる。まるで、ドッジボールで敵に当てるための球。

千恵ちゃんはそれを、パシッ、と両手でしっかり受け止め、ゴールの方に身体を向ける

と、軽くジャンプして、頭の上からボールを放った。
シン、と体育館が静まり返る。
それは、千恵ちゃんがあんなに速いボールを取ったことに驚いたのか、何の迷いもなくスリーポイントシュートを打ったからなのか、それとも、そのシュートフォームがあまりにも美しかったからなのか――。
パスッ、とゴールネットの小気味いい音が、静まり返った体育館に響いた。
それから数秒、誰も動かず、声も出さなかった。
や、誰も動けず、声も出せなかった、と言った方が正しいのかもしれない。
時が、止まったようだった。
そして、その静止した時間は、朱莉の「ナイッシューッ」という一言で動き出した。
止まっていた時間の分だけ溜まっていたエネルギーが爆発したかのように、「おおおおおおおおっ!!」という爆音のような歓声が体育館を包む。
「アオちゃん！　あの娘をマークして！」
大勢の声で埋め尽くされている中で、栞の一際高い声が、ソフト部のエースことアオちゃんに向けて放たれる。アオちゃんはさっきまでミッチーについていたのだけれど、千恵ちゃんに代わったことで、女子バスケ部キャプテンの玲子（れいこ）さんと一緒に、空閑さんについ

ていたのだ。
空閑さんがこれまでかなりいい仕事をしてたからだろう。
「えっ？　でも、今のは偶然じゃ――」
「偶然であのパスは取れないし、もし取れたとしても、あの綺麗なシュートフォームが偶然なわけないじゃない！」
玲子さんがそう叫ぶ。
はー。一回か二回は偶然で済ませてくれるかと思っていたけれど、現実は、や、栞はそんなに甘くなかった。試合前に言っていた『手を抜くつもりはない』という言葉には、これっぽっちの偽りもないようだ。
と、そこで半信半疑になっているアオちゃんのところにパスが回る。
その目の前には千恵ちゃん。
「……」
アオちゃんは疑いの眼を向けながらも、ドリブル突破を試みる。
それに対して千恵ちゃんはピクリとも反応できなかった。
そりゃそうだ。彼女はディフェンスの練習なんて一切していないのだから。
けど、それでいい。そこに立っていてくれるだけでいいのだ。

目の前の相手を抜くことに集中して、それができた瞬間、「やった！」でもいい、「なんだ、大したことないじゃないか」でもいい、ほんの少しでも気が緩めば――。

パンッ！

「なっ!?」

音もなく近づいていた朱莉が、すれ違いざまにボールを奪い去った。

「くっ」

アオちゃんが、キュッ、と身体を反転させて、ドリブルをしながらゴールに向かう朱莉を追いかける。

さらに、朱莉に出し抜かれてマークを外してしまったヒカリも朱莉を追っている。

ゴール目前で二人が背中まで追いついてきた。そこで朱莉が更にスピードを落として、レイアップシュートに入る。

朱莉を追っていた二人が朱莉とゴールの間に身体を入れてジャンプして止めにかかる、が――。

朱莉は空中でボールを乗せていた片手をクッと折り曲げて、自分の真後ろにボールを投げた。

「え――!?」

「な――!?」
まるで後頭部に目があるんじゃないかと思えるくらい正確に、ボールは千恵ちゃんの両手に収まった。
「ナイスパスです、朱莉さん」
言いながら、また完全にフリー状態の千恵ちゃんがスリーポイントシュートを放つ。
誰が見ても完璧なフォームから投げ出されたボールは、リングに当たることすらなく、ネットの中に落ちていった。
一時は13点あった差が、千恵ちゃんが入ってからたった一分程で7点差まで縮まった。
「よし！　追いつけるよ！」
ベンチで休んでいるミッチーが嬉しそうに言う。
「――そうは、させない！」
一気に追い上げられていることに対する焦りからか、それとも対抗意識からか、スローインを受け取った玲子さんが一人でスリーポイントラインまでドリブルで駆け抜け、シュートを打った。が、その直前、途中で一度は抜かれていた空閑さんが、回り込んでジャンプし、指先でボールに触れた。や、触れたというより、掠(かす)った程度だった。でも、それでほんの少し起動がずれたボールはリングに弾かれる。

「くっ――」
玲子さんが顔をしかめる。
すかさず、このコートの中で一番背の高いヒカリと二番目の朱莉がリバウンドに飛ぶ。
バレー部のヒカリのジャンプ力はさすがに凄いものがある。だけど、先にボールに手が触れたのは朱莉だった。
「――っ」
それでも、まだ空中で片手が触れているだけの不安定なボールをヒカリが奪いにかかってくる。そんな切羽詰った状態にも関わらず、朱莉は一瞬ボールから目を離して相手ゴールの方を見遣ると、ニヤリと口だけで悪い笑みを浮かべた。
その表情のまま、パンッとボールを斜め下に叩き落とす。
その落下地点には私、横には栞。
少しでも私が栞より不利な位置にいたり、朱莉のパスがずれたりしていたら、間違いなく栞にボールを取られていただろうけど、完璧すぎるくらい完璧に、ボールは私の両手に。
そして、すぐそばにいる栞が何らかのアクションを起こす前に、私はオーバースローで相手ゴールの方にボールを放り投げる。
「いっけえええええっ!!」

試合が始まってからもどんどん感覚が薄くなり、まともに力を入れることも難しくなっている腕を、気迫で振り抜いた。

ボールはセンターラインを少し超えたあたりでワンバウンド。

そこには誰もいない。千恵ちゃん以外は――。

一応形だけセンターラインまで戻っていた千恵ちゃんは、私がボールを投げる直前に相手ゴールの方に向かって走り出していた。

ワンバウンドしたボールはちょうど千恵ちゃんの頭上に。

「あっとっとっ――」

少し躓くような不安定さで、でも何とか堪えながらボールを自分の前に落とし、床から跳ね返ってきたところをキャッチする。

――パスッ、とゴールネットを揺らして、千恵ちゃんの今日三本目のスリーポイントが決まった。

これで4点差。

三本打って、三本全部入れてしまうという驚異的な得点力。

それも、ほんの数日前までは、ド素人以下の動きしかできなかった千恵ちゃんが――。

本当に「凄い」の一言だ。

だけど――。
「ナイスシュートだねっ」
――ほんの数秒前までは、私のそばに、こっち側のゴール下にいたはずの栞が、もう千恵ちゃんの真後ろまで追いついて、そんな言葉をかけているのもまた驚異的だ。あと一秒、や、あとコンマ一秒でも遅かったら栞の手が千恵ちゃんの放つボールに触れていたかもしれない。
ひっ、と声をかけられた千恵ちゃんが小さい悲鳴を上げる。
「しゅ、瞬間移動、ですか……？」
恐る恐るといった感じで千恵ちゃんが振り返りながら問いかける。
「ん、それは面白そうだね。今度、開発してみようかなー」
開発!?　瞬間移動をっ!?
そんなことまで出来るのか、あの超人は……。
「それはそうと……悪いんだけど、もう入れさせないよ。園山千恵ちゃん」
栞は笑顔でそう言うと、少し大きめの声で指示を出した。
「アオちゃん、文乃（ふみの）と交代！」
文乃……宮原文乃（みやはらふみの）、去年同じクラスだったから知ってるけど、確か文芸部で、それほど

運動は得意ではなかったはず。や、むしろ運動音痴の方に分類しても問題ないレベルだったはず。でも彼女は――。

「文乃、文乃っ」

栞がアオちゃんと交代で入ってきた宮原さんに向かって手をブンブン上下に振る。

「は、はいっ」

宮原さんが栞のそばでしゃがみ込んで栞の顔に耳を近づける。

宮原さんはかなり身長が高い。確か百七十三センチくらいだったはず。ヒカリもかなり高いけど、それに匹敵するくらいの高さだ。

そんな宮原さんに、栞が何かを耳打ちしている。

とはいえ、宮原さんに高度なプレイができるとは思えないのだけれど……。まさか、千恵ちゃんのように、こっそりバレないように何かの特訓をしてきたのだろうか。

だとすると……千恵ちゃんを下げるべきか……？

考えながら、デジタイマー――両チームの得点と残り時間が表示されている何やら高価そうな装置――を見る。

得点は22対26。前半の残り時間は三分を切ったところ。

もし宮原さんが凄いプレイをしてきたとしても、それほど点差を離されるとは思えない

し、マズいと思ったらすぐ対応すればいいだけだ。
それに、勢いに乗っている今、千恵ちゃんを下げるメリットが感じられない。
うん、まずは様子見かな……。
――さえっちのスローインでゲームが再開する。
それを受け取った玲子さんから、絶妙なパスが栞に送られる。
今度こそ、抜かさない！
と、意気込んで栞の行く手を阻もうとした瞬間。
「下ががら空きだよん」
「あっ！」
右か左かと警戒していたら、見事にボールが私の股の下を通過していた。
急いで振り返ったときにはもう栞はゴール下に。
「よっ」
と、その小さな身体では考えられないほどの高さまでジャンプする。
「入れさせないっ」
その栞とゴールの間に朱莉が割り込むようにジャンプしていた。
ジャンプ力は栞の方が上だけど、それだけでは補い切れないほど朱莉の身長は高い。

栞のアンダーハンドのレイアップを、その手からボールが離れた瞬間に片手で叩き落そうとする。

「――!?」

が、普通ならボールを手から離す位置で、栞はボールを持った右手を自分の身体に引き寄せる。

最も高い位置から二人とも落下を始める。

そこから栞がボールを左手に持ち替えながら、クイッと身体を捻(ひね)る。そして、朱莉の右腕の横からボールを持った自分の左腕をグッとと押し入れ、ほぼ手首のスナップだけでボールを投げ上げる。

前回転のかかったボールは、ゴールリングを下から舐め上げるようにしてリングの上まで登り、一瞬だけ静止してから、ストンとネットの中へ吸い込まれていった。

物凄く難しいことのはずなのに、涼しい顔でそれをやってのける栞。

そのプレイにまた会場が大きく沸く。

「……くっ」

朱莉は一度で天井を仰いでから、ガクッと頭を前に倒して悔しそうな声を漏らした。

私はそんな朱莉に何か声をかけようとしたけれど、彼女はブンブンと頭を横に振って声

を上げた。
「まだだ。まだいける！」
「当然！」
リョウちゃんがそれに答えて、強いスローインで朱莉にボールを渡す。
……私が出るまでもなかったか。
ダムダムダム、と低い姿勢のドリブルでコートの真ん中を駆け抜ける朱莉。
キュッ、とその行く手にヒカリが立ちはだかる。
朱莉は身体を右にかわしながら、左サイドを走る空閑さんにワンバウンドのパスを出す。
ヒカリはそれをドリブルのフェイントだと一瞬勘違いし、ボールが投げられた方へと重心を移してしまう。その隙を突いて朱莉は最短距離でヒカリを抜き去る。
ボールをキャッチした空閑さんは間髪を入れずに朱莉にボールを戻す。
ついさっきまで私についていた栞が、いつの間にか、朱莉と空閑さんのプレイを読んでいたかのように、朱莉がセンターラインを超えたあたりで止めに入る。
栞は基本的に私をマークしているけれど、他の誰かが独走状態になったら、それを止めに行っていることが多い。それだと私がフリーになるけど、栞は私へのパスコースを塞ぎながら止めに入る。私が栞に取られずにパスを通せる位置に動こうとしても、栞は三百六

十度見えているんじゃないかと思えるほど正確にパスコースを塞いでくる。
「ホント、凄いわ……。でも、これならどう!?」
朱莉は大きく一歩引いてから、栞がジャンプしても届かない高さの、山なりのパスを私に向かって投げる。
が、栞はそれさえも予想していたのか、朱莉がボールを投げると同時に全力で私に向かってダッシュしてくる。
ボールと栞の徒競走だ。
山なりな分、一直線に投げるより当然私に届くまでに時間がかかる。だから、栞の俊足をもってすれば、ボールに追いつくことも可能かもしれない。
でも、私は朱莉を信じる。朱莉を信じて、ボールの落下点を目指して走る。
疾(と)うに走っている感覚はない。どうやって脚に力を入れればいいのかも分からない。
呼吸が乱れて胸が苦しくなる。どうやって空気を吸えばいいのかも分からない。
それでも、前に前に身体を突き動かす。
「たあっ」
妙に可愛い掛け声とともに栞が半身で飛ぶ。
「――っ」

ボールに向かって延ばした栞の手は、その指先が掠るだけにとどまる。
――ドスン！
かなり無理な体勢で飛んだ栞は、それでも空中で態勢を整えて、綺麗な受け身を取っていた。
その栞が床に着いたのとほぼ同時に、私はボールをキャッチした。
お願い、入って！
そう願いながら、私は感覚のない指先からゴールに向けてボールを放つ。
――けれど、その願いは届くことなく、ボールは無情にもリングに弾かれる。
や、もうこんな状態でリングに当たっただけでも奇跡的なのかもしれないけれど……。
そして、さっき私の後ろで倒れていた栞が、もうゴール下でリバウンドを取ろうとジャンプしていることは、もはや驚くほどの出来事ではないのだろう。
栞よりも若干不利な位置で、朱莉もボールに手を伸ばして飛ぶ。
ボールに触れたのは同時。だけど、二人とも片手で、しかも手全体ではなく指二本くらいで触れただけだった所為で、ボールは二人の手から横回転で抜け落ちる。
それを下でキャッチしたリョウちゃんがシュートを打とうとした瞬間、これまでリョウちゃんをマークし続けていたテニス部の亜紀（あき）が両手を掲げてシュートコースを塞ぐ。亜紀は

得点にはあまり絡んでこなかったけど、ずっとリョウちゃんの動きを抑えてきていた。ディフェンスは相当上手い。ちょっとやそっとのドリブルで躱せるような相手ではない。

「リョウさん！」

千恵ちゃんが、自分についていた宮原さんがゴール下の動きに見入っている隙を突いて、スリーポイントラインに沿って走りながら声をかける。

「はいっ！」

それに気づいたリョウちゃんがパスを出す。でも、千恵ちゃんが声を出したことで、当然そのことに宮原さんも気づいてしまった。

パスが出された直後に宮原さんが千恵ちゃんの方へ走り出す。

胸の前でボールをガッシリつかんだ千恵ちゃんがシュート体勢に入る。

少し膝を屈めてから、頭の上にボールを持った両手を移動させながら軽くジャンプした瞬間。

「あっ!?」

走っていた宮原さんが、慌てていた所為か、躓(つまず)いたように前にバランスを崩して千恵ちゃんに頭から突っ込んでいく。

「千恵ちゃん！　危な――」

誰かが声をかけたけれど、ジャンプして今にもシュートを打とうとしている千恵ちゃんに避ける術はない。

――ドンッ！

「ッ!?」

千恵ちゃんがシュートを打つ直前、左肩に宮原さんの頭がぶつかる。

ドサリ、と千恵ちゃんと宮原さんが倒れ込む。

千恵ちゃんが投げたボールは、軌道がずれ、バックボードの隅に当たって落ちた。

ピーッ!!

審判の笛が鳴る。宮原さんのファウルだ。

「千恵ちゃん！」

「大丈夫!?　怪我とかしてない？」

近くにいたリョウちゃんと朱莉が真っ先に駆け寄る。

「は、はひ……。大丈夫です」

言いながら、自力で立ち上がる。

「ごめんなさい！　ごめんなさい！」

そんな千恵ちゃんに宮原さんがひたすら頭を下げている。

「い、いえ、大丈夫ですから――」
逆に申し訳なさそうにパタパタと手を振る千恵ちゃん。
「フリースローです」
ボールを持った審判が千恵ちゃんに言う。
それを聞いた千恵ちゃんは、キョトンとした顔で――。
「フリースロー……？　なんですか、それは？」
……。
場が凍りついた。
「ええと、フリースローっていうのはね――」
リョウちゃんが苦笑いしながら手短に説明する。
「――は～、なるほど～。ではこの場合は三本打てるんですね」
やっと理解した千恵ちゃんがフリースローラインまで移動して、審判からボールを受け取る。
ひたすらパスのキャッチとスリーポイントシュートの練習しかしてなかったから、フリースローは少し心配だけど、どうだろうか……。
――パサッ。

そんな私の心配をよそに、スリーのときと同じ美しいフォームで一本目を決めた。
それに続けて、なんと二本目も、三本目も決めた。
「ナイス千恵ちゃん！」
「よし、これで3点差！」
また会場の歓声が熱を上げる。
場を凍らせたり、燃え上がらせたり、今日の千恵ちゃんは色んな意味で大活躍だ。
ところが――――。
「千恵ちゃん！」
ヒカリが出したパスをカットした朱莉が、自ら相手ゴールの近くまでボールを運び、また宮原さんのマークをかわした千恵ちゃんにパスを出した。そこまでは良かった。願ってもない綺麗な流れだ。
けれど、それからの千恵ちゃんのシュートフォームがこれまでと違った。ジャンプは中途半端、腕も上がりきっていない、おまけにリリースポイントがジャンプの最頂点に達する前、つまり投げるのが早すぎだった。
そんなフォームで入るはずはなく、リングの手前にガンッとボールが当たり、斜め下に落下。リバウンドに飛んだ玲子さんがミスでボールを弾き、バックラインの外に出たのは

不幸中の幸いだったかもしれない。
でも、どうしてあんな……。
「もしかして――」
さっき宮原さんにぶつかられたときに実は怪我をしているのでは……。かなり激しく倒れていたから、手首の一つや二つ捻っていてもおかしくない。それとも足首――？
「千恵ちゃん」
私はすぐに声をかけて確認したけれど、特に怪我をしている様子はなく、やせ我慢をしているようでもなかった。
じゃあ、なんで――？
さらにそれからもう一回、千恵ちゃんがシュートを打てる状況ができたけど、それも同じ縮こまったシュートフォームで外してしまった。
「まさか――」
さっきのあれで、恐怖心が出てきてしまったのだろうか。宮原さんも千恵ちゃんも怪我こそしなかったものの、かなり激しく倒れていた。それに、もともと身体が大きい宮原さんを、小さな千恵ちゃんから見たら、より一層巨体に見えるだろう。そんな宮原さんが、いつまた突っ込んでくるかもわからない状況なんだ。これで恐怖を感じるなという方が難

しい。
でも、どうすればいい？　千恵ちゃんを下げて、ミッチーを戻すか。それとも――。
「ソノッちー!!」
「わわっ!?」
ボールがサイドラインを割って、こっちチームのスローインになった直後、空閑さんがまた変なあだ名を叫びながら、千恵ちゃんにフライングボディアタックを決めた。
ドスンッ!!
激しい衝突音の後、空閑さんが上から千恵ちゃんを押しつぶす形で倒れ込む。
「ふぎゅっ」
千恵ちゃんの喉から妙な音が漏れる。
「ははは！　どーだソノッち」
「『どーだ』じゃないだろ！」
スパンッ、とすかさずリョウちゃんが空閑さんの頭を手で叩く。
「なにやってるんだお前は！」
「いやいや――。大丈夫かソノッち？　痛かったか？」
「大丈夫です。それほど痛くもありませんでしたし――」

千恵ちゃんが起き上がりながら答える。
「ふっ。つまり、そういうことさ」
「はい？」
「どういうこと？」
二人が首を傾げると、空閑さんは、ビシッと千恵ちゃんを指差しながら言う。
「ソノッちはそう簡単には怪我をしない！」
「えっ？」
「……」
言われた千恵ちゃんはポカンとした顔をして、リョウちゃんは「何を言ってるんだコイツ」みたいな顔をしている。
「ソノッちはよく転んでいるからな。一日平均五回くらいは転んでるんじゃないか？」
「いえ、そんなことはないです！」
おお、さすがの千恵ちゃんも反論するか。
そりゃ一日五回はないだろう――。
「一日十回くらいは転んでます」
もっと多かった！　しかも二倍！

「うむ。では、コレを見よ！」
ガバッ、と空閑さんが千恵ちゃんの下のジャージを両手で下ろした。
「ひゃ!?　いきなり何をするんですかっ」
ジャージの下に体育用の紺色のハーフパンツを穿(は)いてはいるものの、当然の反応を見せる千恵ちゃん。っていうか、ホント空閑さん何してるんだ……。
「アザ一つない綺麗な脚じゃないか。普通、そんなに転んでいたらアザなり擦り傷なりができているはずだ。だというのに、それが全く見当たらない」
「確かに……そう言われてみれば……」
「ソノッちは尋常じゃないほど転んでいるが故に、自然と受け身がプロフェッショナルレベルまで上達しているのだよ。それも、ありとあらゆる体勢での受け身ができるようになっているはずだ」
「ああ、なるほど」
うんうん、と頷くリョウちゃん。
「そ、そうだったんですかー!?」
なぜか一番驚く千恵ちゃん。
「そんなわけだから、あんなただ図体(ずうたい)がデカイだけのヤツなんて気にするな。それに、こ

っちはソノッちの方がデカイと思うんだ」
「なっ、なぜ私の胸を揉むんですか!?」
「いや、確認のために」
「そんなの確認しなくていいですっ」
「あっはっはっ」
――ああ、これできっと千恵ちゃんは大丈夫だ。
そう安心した次の瞬間、薄くなっていた感覚が、意識が、さらに薄れていく。
「あ――――」
マズいなあ。これまで、どういうわけだか知らないけど、視覚と聴覚には問題がなかったのに、ついにそれもおかしくなってきた。見える世界が徐々に狭まり、色が薄くなり、ぼやけていく。聞こえていた音が、徐々に小さくなり、遠くなり、途切れ途切れになる。
ダム……ダム……。
どこか遠くで誰かがドリブルをしている。もはやそれが敵なのか味方なのかも分からない。
――――――――。
辛うじて繋ぎ止められていた世界から、徐々に切り離されていく感覚。

「――佳苗！」
朱莉の声だ。
それと同時に私の視界をボールが横切る。
パスだったのか、誰かにカットされて偶然こっちに飛んできたのか。や、そんなのはどっちでもいい。とにかく、取らないと――。
がむしゃらに走り出す。
いま私、ちゃんと走れてるのかな……。
自分がどんな姿勢で、どんな風に走っているのかもわからない。それでも、バウンドを繰り返しながら私から逃げようとするボールを必死に追いかける。
あと少し――。
そう思ったとき、低く跳ね上がったボールのちょっと先にラインが見えた。たぶん相手ゴール側のバックラインだ。
私の周りに人の気配はない。
せっかくのチャンスだっていうのに、このまま無駄にしてしまうのか……。
「佳苗さん！」
千恵ちゃんの声が後ろの方から聞こえてくる。

や、いける。まだ、追いつける！
「たあああああ！」
叫びながらボールに向かって踏み切る。
空中で右手がボールをガッシリと掴む。
「千恵ちゃん！」
見えてはいない。ただ、今さっき声がした方に向かって、全力で右手を振り抜いた。
ドサッ、と私は床に倒れる。
「ナイスパスです！」
千恵ちゃんの声。
よかった。ちゃんと届いたんだ……。
スパンッ、とボールがネットの中を通った音が、凄く凄く遠くから聞こえた、ような…
…気が――。

◆

――真っ暗だ。

何も見えない。ただ暗闇だけが広がっている。や、広がっているのではなく、狭まっているのかもしれない。私にとっては、どちらでも同じことだけど……。

もう視覚さえもなくなってしまったのかな。

目を凝らして、あたりを見渡す。グルリと一周……したのかも分からない。半周くらいしかしてないかもしれないし、実は三周くらいしたのかもしれない。

けど、何も見えない。

ふう、と息を吐き出しながら顔を上に向けた。

そのとき、遠くの暗闇の切れ目から、白い光がスッと差し込んだ。それはまるで、夜空に浮かぶ黒い雲の隙間から覗く月の光。や、月の光そのものだ。

少しの間、そうやって光の方を見ていると、ちょっとずつ雲が退いていき、真ん丸の月が姿を現した。

「――ここは」

それからもう一度あたりを見渡すと、ここが美月の家のそばにある川だということが分かった。

ついさっきまでは学校の体育館でバスケをしていたはずなのに、どうしてこんなところに――。しかも、あろうことか、私は素足で川の流れの真ん中にいる。

いつもの私なら、「どうしてこんなことに!?」とか言って慌てるのだろうけど、今の私の思考は異様なほどに冷たく、静かだ。

こんな真冬に川に素足で浸かっているなんて、正気の沙汰じゃない。もし私がそんな人を見かけたら、引く。ドン引きだ。つまり、いま私は私自身にドン引きしている。

当然冷たさなんて感じない。水の流れが足に当たっていることも、足裏に広がっているであろう小石のゴツゴツもわからない。ただ、見下ろした目に、水に浸かる自分の足が映るだけ。

その足から少しだけ前方、屈めば丁度手が届きそうなところに、白い月の光がゆらゆらと浮かんでいる。

私はとても緩慢な動作で、水面(みなも)の上の白い光を両手で掬(すく)い上げた。その両手にも感覚はない。もし感覚があったら冷たく感じるはずだ。それなのに、なぜか両手が少し温かく感じる。それが、とても大切なもののように――。

「あ……」

不意に、大切な人たちの顔が浮かぶ。

大事な仲間たちの顔が、大好きな人の顔が――。

私はそれが零れ落ちないように両手の隙間を、指と指の隙間を、ギュッと閉じる。

それなのに、少しずつ、少しずつ、零れ落ちていってしまう。
それと一緒に、私の記憶が零れ落ちていく。
浮かんでいたみんなの顔が消えていく。
一人、また一人――。
嫌だ……。
手に力を入れれば入れるほど、流れ落ちていく。
忘れたくない！
止処(とめど)なく流れ落ちて、消えていく。
――独りに、なりたくない！
そう叫びたくなったのを、グッと堪(こら)えた。
もしこの消えていく記憶が、美月の記憶になってくれるんだとしたら、それは願ってもないことじゃないか。もちろんどこにもそんな保証はないけれど、それでも――。
自分の両手を見ると、もうそこには何も残っていなかった。
あたりが徐々に暗くなる。
どうやら、月がまた雲で隠れ始めたようだ。
「……」

――どれくらいの間、こうして立っていたのだろう。というか、もう立っているのかどうかも分からない。
暗闇に包まれたまま、私自身が薄れていくのを感じる。
自分が何者か、分からなくなっていく。
深い闇の中に沈んでいく。
底なし沼に足を踏み入れたように――。
闇に引き込まれながら、溶けていく。
私のすべてが、消えていく。
「さようなら」
私は右手を頭の上に伸ばしながら言う。
「そして――」
誰に宛てているのかもわからないし、声になっているのかもわからない。でも、最後にこれだけは言いたかった。
「あ――」
「させない!!」
大きな声と同時に、パシンッ、と私の右手を掴む音がした。感覚なんて疾うになくなっ

ているはずなのに、右手に握られた温かさを感じる。
「だれ……？」
声のした方に顔を向ける。
ぼやけていてよく見えないけど、なんだか、とてもよく知っている人の顔が、そこにあるような気がする。
「佳苗っ！」
かなえ……。なんだろう。凄く、懐かしい響きだ。
「まだだよ……。まだ終わってないんだよ。あなたが言い出したことでしょう？　ちゃんと最後までやり遂げなさいよ！」
「なにを――」
なにを、言っているのだろう……？
もう私には、なにも残っていない――。
「あなたのことを待ってる人たちがいるんだよ！」
誰が……？
「ミッチーに千恵ちゃんに朱莉さん、それに空閑さんにリョウさん。他にもたくさんいる。それに……高浜君だって――」

わからない……。

「栞に勝つんだって言い出したの、あなたでしょう？　そのあなたが、頑張ってるみんなをほったらかしにして、勝手にどこ行こうとしてるのよ!?　そんなの、私が許さない！」

「――――っ!?」

私の手を握る力が強くなる。

握られたところから、温かさが全身に広がっていく。

水面の上を広がる波紋のように、少しずつ、でも確実に、身体の隅々まで温もりが伝わっていく。腕から肩に、肩から胸に、胸から腰に、腰から脚に。そして、頭にも――。

冷え切って、凍り付いていた頭が、温もりで満たされていく。

――たくさんの人たちの顔を思い出す。

――たくさんの出来事を思い出す。

そして、私自身のことも――。

「そっか……」

私の周りは――。

「そうだったね、美月」

――こんなにも温かかったんだ。

険しかった美月の顔が、スッとほころぶ。
「思い出した？　じゃあ、行くわよっ」
「――――」
彼女のとても綺麗な笑顔に見とれているうちに、私は闇の中から引き上げられていた。

◇

真っ白な世界。
ここには、佳苗と私だけ。
さっきまで佳苗が沈みかけていた暗闇も、川も、空も、月もない。ただただ真っ白な空間。どこまでも続く、暖かい白。どっちがどっちかも分からない。
でも――。
「さあ、行こう」
私はそう言い、彼女の手を引いて歩き出す。
ひたすら進めばいい。進んだ方に出口がある。進んだ方が出口だ。そういう確信がある。
「美月……」

佳苗が私の後ろから、躊躇(ためら)いがちに声をかけてくる。
「なに？」
「どうして、こんなことを――？」
「私があなたに凄く、物凄く、この上なく感謝してるから、かな。あなたは私にとって、凄い恩人なんだから」
私は彼女の方へ振り返って、ゆっくり後ろ歩きをしながら、話を続ける。
「私はあなたのお陰で、今こうして生きていられる。その上、昔はやりたくてもできなかったことが、たくさんできるようになった」
「できなかったこと？」
「そう。一番はスポーツかな。生まれつき心臓が弱かった私は、スポーツというものをやったことがなかったの。一度、なんでもいいからスポーツをやってみたかった。サッカーでもバスケでも、徒競走なんかでもよかった。思いっきり身体を動かして、誰かと競って、勝って喜んだり、負けて悔しがったり、そういうことをしたかった。まあ、そんなわけだから、スポーツならなんでもよかったんだけどね……実は一番やりたかったのがあったんだ。なんだと思う？」
佳苗は狭い歩幅で歩きながら、うーん、と腕を組んで考える。

「――バスケ？」
「残念、ハズレ。正解はＣＭ２の後で」
「ＣＭ２!?」
「嘘、嘘。正解はね、ドッジボール」
「えっ？」
なぜか随分と驚いた顔をしている。
「そんなに驚くようなことかな？」
「や、まあ、いろいろと……ね」
「ふーん」
「なんでドッジボールなの？」
「大した理由じゃないんだけどね、小学生の頃、休み時間になると、みんなが凄い勢いでグラウンドに飛び出して行って、ドッジボールしてたんだ。私は教室の中から窓越しにそれを見てたんだけど、それがとっても楽しそうで、羨ましかったから――」
「でも、今日の午前中、ドッジボールできたんでしょ？」
「うん。思ってた以上に面白かったよー。まあ、初めてだったから、いろいろ苦労したけど、最終的には勝てたしね」

「そっか……。その……チームの、クラスのみんなは……」
「……ん？　クラスのみんなが、なに？」
聞き返すと、佳苗は少しだけ難しそうな顔をしてから。
「――や、いいや。いろいろ聞きたいこともあったし、言いたいこともあったんだけど、美月のその笑顔見てたら、どうでもよくなったわ」
「え？　私そんなにニヤけてる？」
私はペチペチと自分の顔を両手で触って何かを確かめる。
「自覚ないの？　今ここに鏡があったら見せてやりたいわー」
「あははっ。残念ながらその言葉、そっくりそのまま返してあげる」
「ええっ!?　私もっ？」
彼女もペチペチと自分の顔を両手で触っている。
二人してなんてマヌケなことをしてるんだ……。
そんなことを思った直後、二人同時に「ぷっ……あはははははっ」と吹き出した。
それから二人で一頻(ひとしき)り笑った。
楽しかった。
嬉しかった。

温かかった。
二人でずっと笑っていたかった。
その理由は、きっと私も佳苗も一緒なんだと思った。いや、違う。ただ、そう思いたかった。だって、そうじゃないと、私は泣き出してしまいそうだったから――。
「さて、そろそろ行かないと、みんなが待ってるんでしょ？」
そう切り出したのは佳苗だった。
「そうだね。それじゃ、さっさと戻るとしますか！」
私は、レッツゴー、と掛け声をかけつつ左手をかざしながら回れ右をして、さっきまで向かっていた方にまた歩き出す。
「――じゃあ、頑張ってね、美月」
「えっ!?」
「振り向かないで!!」
振り向こうとした私の身体を、佳苗の大声が一瞬抑止する。
「なにを言って――っ!?」
それでも振り返ろうとした私の背中に、ドンッ、と佳苗がぶつかってきて、そのまま彼女の両腕が私の両腕とお腹をギュッと締め付けてくる。

「佳苗……？」
「お願いだから……振り向かないで」
彼女の声は、微笑んでいるようでもあり、泣いているようでもあった。
「……どうして？　ここまできたのに。あとちょっとなのに。あなただって、最後までやり遂げたいでしょ？　それなのに、どうして――？」
「そうだね。ワガママを言うなら、みんなのところに戻りたいし、バスケもやりたい。せめてこの試合の最後までって、そう思ってた……」
「いいじゃない、それで……!!」
「でもね、もう無理みたいなんだ……」
私の身体の前に回された彼女の両腕が、少しずつ、消えていく。締め付けられている感覚も薄まっていく。
「戻ろうよ、みんなのところに。それで、バスケしようよ！」
私は喉の奥から搾り出すように声を発する。
「泣かないでよ、美月」
「だって、だって……」
堪(こら)えきれなくなって、温かいものが頬を伝う。

「大丈夫。私はあるべき場所に帰るだけ。本来の役割に戻るだけだから」
私をなだめるような、とても穏やかで優しい声。
「なんで……なんでそんなに冷静でいられるの!?」
「ずっと前から、覚悟していたことだったから――」
「嫌だよ……。私は、嫌だよ。だって、佳苗は私のためにこんなにたくさんのことをしてくれたのに、私はまだ佳苗のために何もしてあげられてない」
「そんなことないよ。本当なら数年前に終わっていたはずなのに、それが、あなたのお陰でこんなにも長いこと楽しむことができたんだから。それに、最後に、独りぼっちになりそうだった私に、こうして、こんなにも素晴らしい贈り物をくれた。それだけでもう十分だよ」
佳苗の身体はもうほとんど見えなくなって、今にも消えそうになっている。こんなに近くで喋っているはずの彼女の声も、もう遠くの葉擦(はず)れのようにしか聞こえない。
「でも、でも……それでも私は……っ」
次から次へと、止め処なく溢れ出す。
「参ったなぁ。ホント、彼の言うとおりだった……」
「え……？」

「や、なんでも――。そうだなあ。じゃあ、一つだけ心残りがあるから、それを美月の手で叶えてくれないかな」
「なに？　なんでも言って」
「栞に勝って。バスケで栞のクラスに勝って」
「……うん。任せて」

それじゃあ――

佳苗のその言葉はもう声にはなっていなかった。
それでも、私には確かに聞こえた。

――ありがとう。

「それは私の台詞だよ……。ありがとう、佳苗」
両手で頬を拭(ぬぐ)ってから、振り向くことなく、しっかりと前を向いて歩き出した。
どこまでも続く眩しい光の中へ。

◇

「――おおおおおっ!!」という歓声が耳にフェードインしてくる。

ちょうど、どちらかのチームのシュートが入ったところのようだ。だけれど、まだ目が明るさに慣れていない所為で状況がよくわからない。私は何度も瞬(まばた)きを繰り返しながら状況を把握しようとする。

「おはよう」

ぬっと私の前に顔が現れた。

「たっ、高浜君!?」

ゴンッ！

「いたっ！」

「いっっ！」

驚いて身体を起こしたら、彼の額と私の額が激しくぶつかった。

「ううう……」

二人とも呻きながら自分の額を押さえて蹲(うずくま)る。

「いきなり立とうとするなよ……」

「高浜君が唐突に近すぎるんだよ……」
というか、察するに、もしかして私、高浜君に――。
「膝枕されてたっ!?」
「正解だ」
私のそばに立っていた大きな男がそう答えた。
「誰？　……って、ああ、来栖キャプテンか」
この学校にこれほど背の高い人間は、男子バスケ部キャプテンの来栖啓を除いて存在しないはずだ。
「膝枕は俺の案だ。グッドアイディアだろう？」
その巨体がビシッと親指を立てて聞いてくる。
「う、うん？　えーと……」
「ふはは。グッドアイディア過ぎて良い褒め言葉も見つからないようだな。案ずることはない。『なんてアーティスティックなんだ！』みたいな素敵な褒め言葉を期待しているわけではないからな。ただ一言、『グッドモーニング』と返してくれればいいのだよ」
「グ、グッドモーニング？」
「残念ながら今は夕方だがなっ！」

「ええっ??」
私の頭の中はクエスチョンマークで満たされていた。
「もうお前は黙ってろ。お前が喋ると話が脱線するどころか、別次元にすっ飛んでくから。ほら、美月さんも困ってるだろ」
「さもありなん！」
偉そうに言いながら胸を張る来栖君。
「悪いな。こいつのことはブレーキが壊れたジェットコースターだとでも思って諦めてくれ」
「は、はあ……」
分かったような、分からないような。
「あ、いや、そんなことより――」
と、本題に入ろうとしたところで、ドタドタと女子達が集まってきた。
「はぁはぁ……さっきから、なに楽しそうに、騒いでるのさ。こっちは、大変なことに、なってるってのに……」
息も絶え絶えといった感じでリョウちゃんが話しかけてくる。
「まったくだ。遊んでる場合じゃないぜ」

額の汗を拭いながら空閑さんが言う。
「さっさと、手助けに来い」
どうやら試合の途中でタイムを取ってこっちに来たようだ。
女子は全員同じように汗だくで息を切らしている。両膝に手をついて肩で息をしている娘もいるし、中には疲労で脚がガクガクと震えている娘までいる。
「あのっ」
私はそんなみんなに頭を下げる。
「ごめんなさい。私、佳苗を……連れ戻せなかった……」
唇をかみ締める。
せめて涙だけは、流さないように。
「なに、気にするな」
「そうです。頭を上げてください」
「……佳苗のやつ、何か言ってた？」
朱莉に聞かれて、頭を上げてから答える。
「栞に、栞のクラスに勝って、って。それから、『ありがとう』って――」
それはきっと私に向けたものでもあり、みんなに向けたものでもあったのだと思うから。

「――ったく、『みんなで戦って、みんなで勝てばいいのよ』とか言ったのはどこの誰だったか……」
「まあ、そう言うなスズリー。その『みんな』のうち、まだ一度もこの試合に出てないやつがいるじゃないか。そいつを出せってことだろうよ」
「そうです。それではじめて『みんなで戦った』ことになるんですから」
「はぁはぁ……。というか、代わってもらわないと、もう私が限界だわ……」
両膝に手を置いて荒い呼吸をしながら、ミッチーが言う。
「ついさっきまでは、勝ってたんだけどね。いまさっき栞に入れられて50対51。1点差で負けてる。残り時間は、たった48秒。……美月、いける？」
「当然いけるよな、ミツキン」
「いける。……いや、勝ちにいきます」
一瞬、みんなが息を呑んだのが分かった。
それと同時に、自分が無意識のうちに右手の甲をみんなの前に差し出しることに気づいた。本当に無意識の行動で、自分でもビックリしたくらいだ。でも、これが私の意思ではないのだとしたら――。
「はっはっは！　上等だ。ハナッからそのつもりでやってんだからな」

空閑さんがそう言って私の手の上に自分の手を重ねた。
「あと一本決めればいいだけだもんね」
さらにリョウちゃんがその上に手を重ねる。
「……勝つよ」
短くそれだけ言って、朱莉も手を重ねてくる。
「えーと……が、がんばりましょう！」
千恵ちゃんも――。
「私たちのことも忘れてもらっちゃ困るわねー」
「そうそう。後半の最初頑張ったの私たちなんだから」
他のみんなも次々に――。
「ちょっと、私も入れてよー」
最後の方には隙間がなくなって、肩と肩の間から無理やり腕を入れてくる。
そして――。
「あとは、任せたよ」
最後にミッチーが手を重ねて、クラスの女子十四人全員の手が、みんなで出来た円の中心に重なった。

私はみんなの手の重みを感じながら、さらにその上に自分の左手を重ねて言う。
「みんなで戦って、みんなで勝つ！」
全員が「おーっ!!」と声を出して、一度深く沈めてから、持ち上げながら互いの手から離れる。
「さあ、行こう！」
――コートに出たのは、空閑さん、リョウちゃん、朱莉、千恵ちゃん、そして私。
こっちチームのゴール下から、リョウちゃんのスローインで試合が再開する。
受け取った私はドリブルを始める。私がバスケットボールをやるのは当然初めてだけれど、これまでに何度もやったことがあるかのように、身体が自然に動く。
その直後、私の前にやや身長が高い娘と私と同じくらいの娘の二人が並んで立ちはだかった。
「絶対に行かせない！」
二人は腰を落として両手を広げている。その間にはほとんど隙間がなく、どちらかの横から抜くことも、パスを出すことも難しそうだ。
とはいえ、まあ、こんなところで時間を食っている場合じゃあないんだよね。
私は体育の授業をずっと見学していたけど、何も考えずにただ見ていたわけじゃない。

こういうときはこう動けは上手くいくんじゃないかとか、こんなプレイをしたら面白いんじゃないかとか、色々考えながら見ていた。
そんなことを考えても無意味だと思っていた。
一生役に立たないと思っていた。
でも――!!
左手でドリブルしていたボールが床から跳ね返ってきたところを、右手で左下にバックスピンをかけながら叩く。それと同時に身体を右側へ傾けて、右足を一歩だけ踏み出す。
向かって左側の娘はボールにつられて、右側の娘は私の身体につられて、一歩ずつ左右に動く。
真ん中!!
踏み出した右足の反動を利用して身体を前方に。バウンドして戻ってきたボールを左手で正面に。
「なっ!?」
驚く二人の間を飛ぶように駆け抜ける。
視界が開け、私と反対側、右サイドを走っている朱莉がフリーなのが見える。
ドリブルで行くよりパスを出した方が早そうだ、と真ん中のラインを越えたあたりを走

る朱莉に全力でパスを出す。
パンッ、と朱莉の右手がそれを受け止める。
「おっと。パス強いよ」
そんなことを言って、苦笑いしているけど、随分軽々と受け止めてたように見えた。
その朱莉に、試合終盤とは思えない身のこなしで長身の娘がボールを奪いにかかる。
朱莉がドリブルを始めるその瞬間を狙っていたのだろうけど、朱莉の手から離れたボールは床ではなく、私の左手に、パシンッ、と強く当たった。
「人のこと言えないじゃない」
朱莉にパスを出した後、自分でも驚くほどのスピードで、朱莉よりも相手ゴールに近い位置まで私は走っていた。
誇張でもなんでもなく、身体が羽のように軽い。
「これ以上は、行かせないよー」
今度は目の前に、白くて小さい少女がどこからともなく現れた。それは瞬間移動でもしてきたのではないかと思うくらい気配がなく、そして高速な動きだった。
「あなたとやりあうのは初めてだね、美月。でも負けないよ。なんせ私は万能だからねー」
心臓がドクンと大きく跳ねる。

「『自称』でしょ？」
私を鼓舞するように、鼓動が強く、速くなる。
――うん、大丈夫。
さあ行くよ、佳苗。
左手で真下にバウンドさせていたボールを少しだけ強く右下に。左足を一歩前に出して栞に対して半身に。右手で跳ね上がってきたボールに触れるフリを一瞬してから、高速で身体を右回転させる。その途中、左手でボールに触れ、栞と左脇のラインの間に叩きつける。そして、身体をボールと栞の間に割り込ませて、そのまま左手のドリブルで一気に駆け抜ける。
抜いた！
誰もいないゴール下に駆け込んで、シュートを打つ。
「あまいよっ！」
また音もなく私の前に現れた栞が、高く、のけぞるように飛んで、私の手から離れたボールに指先を掠らせる。
ゴンッ、とボールがリングに弾かれる。
「おとなしく入ってなさい！」

高くジャンプした朱莉が、空中でボールを掴み、そのまま再度リングめがけて投げる。
「させない！」
朱莉の真後ろを走ってきていた長身の娘が、朱莉とゴールの間に回り込んで飛び、指先でボールを弾く。
「しぶてぇな、おいっ」
「それはこっちの台詞っ」
空閑さんと相手チームの娘が同時に飛ぶ。先にボールに触れたのは空閑さん。でも、すぐにそれを奪われそうになる。
「リョウ！」
空中で相手の手をかわしながら右後ろにいたリョウちゃんにパスを出す。
「打たせないっ！」
「あんたホントいい仕事してるわ」
即座にリョウちゃんの前に両手を上げて立ち塞がった娘に向かって言いながら、リョウちゃんは手首の動きだけで後方にボールを投げる。
「ナイスパスです」
それをノーバウンドで千恵ちゃんがキャッチした。

「終わりです」
千恵ちゃんはボールを持った両手を頭の高さまで上げながらジャンプした。
そのシュートを止められる人はいなかった。もし千恵ちゃんにパスが渡った瞬間に、栞が全速力でそこへ向かっていなかったら、の話だけれど。
栞が千恵ちゃんのシュートコースを塞ぐように高く飛ぶ。
「美月さん！」
千恵ちゃんの横の方に移動していた私に、真っ直ぐ、速いパスが飛んできた。
「あっ!?」
栞の目が見開いていた。
彼女はまだ空中にいる。もう私を邪魔することはできない。
顔の前でボールを構える。
――心臓の力強い鼓動が聞こえる。
膝を曲げてから、軽くジャンプする。
――全身に温かい血液が巡り、指先の神経が研ぎ澄まされる。
ああ、もう外れる気がしない。
ジャンプが最高点に達した瞬間、左手でボールをゴールに向けて押し出した。

直後、試合終了のブザーが鳴り響いた。

◇ エピローグ ◆

見上げた空は、高く、青く澄み渡っていて、太陽が眩しく光っている。
見下ろした水面（みなも）には空の青が映りこみ、その流れに太陽の光がキラキラと弾かれている。
それでも肌に触れる空気は氷のように冷たく、足元を流れる水はそれ以上に冷たい。
冷たさを通り越して痛みすら感じる。
まるで鋭利な刃物を押し当てられたよう。
これが私の感覚――。
数日前、いや、数週間前だったか……まあ、そんなことはどうでもいいのだけれど、以前同じようにこの川に入ったときは、こんな風（ふう）には感じられなかった。とても遠かった感覚が、今ではこんなにも近くにある。
弱い風が吹いて、私の髪をちょっと揺らし、頬を軽く撫でた。
そんな些細なことにも気づくことができる。
それもみんな、あなたのお陰なんだよね――。
トクン、トクン、と穏やかに脈打つ左胸に手を当てて思う。
あなたがいたから、私は、こうして色々なことを感じられる。できなかったこともでき

るようになった。そして、そして――。
「おーい。いつまでもそんなとこにいると足が凍るぞー」
「えっ!?」
いきなり後ろから声をかけられて、驚いて振り向く。
「高浜君!?」
「そんな驚くなよ。むしろ、俺の方が驚いたよ」
「え……」
「そりゃ、時間になっても待ち合わせ場所に来ないし、ケータイに電話かけても出ないし」
あ、もうそんな時間!?
あと、ケータイはマナーモードで鞄の中だ……。
「家に行ってみたら、とっくに家を出たって言われるし、それでここに来てみれば、このクソ寒い中、裸足(はだし)で川の中に入ってるんだから、驚くなと言う方が無理だ」
「ええー。じゃあ靴履いて川に入れって言うの？」
「裸足なのが問題なんじゃねぇよ！　川に入ってることが問題なんだよ！」
「ははは。冗談、冗談。でも、よくここだって分かったね」
歩いて川から出ながらそう言うと。

「そりゃ私は万能だからね。それくらいは余裕で分かるよー」
「栞!?」
高浜君の後ろ、緑の土手の上から、白くて小さい生物が駆け下りてきた。
「なんで栞がここに!?」
高浜君が現れたときの十倍は驚いた。
そして、その直後。
「私たちもいるよー」
「ミッチー!?」
「アタシの奢りだってのに、遅刻とは随分ナメた真似してくれるじゃないか、ミツキン」
「空閑さんも!?」
「さっきまで、『事故にでも遭ったんじゃないか!?』とか言ってうろたえてたヤツがよく言うよ」
「リョウ、余計なこと言うな！」
「リョウちゃん」
「みなさん、足速いですね……はぁはぁ……」
「千恵ちゃん」

「まったく、そんな急がなくてもいいでしょうに――」
「朱莉」
「やっほー」
「待ち合わせにはちゃんと来ないとダメだよー」
「心配しちゃったよ」
クラスの女子が次々に駆け寄ってくる。
「――その他のみんな」
「その他言うな！」
「あの試合の後半、あんたがぶっ倒れてる間、私たちだって必死に頑張ってたんだからね」
「あはは。ゴメン、ゴメン」
「まあ、何はともあれ、これで女子全員揃ったな。さあ、パフェ食いに行くぞ、パフェ」
空閑さんのその言葉に、全員が「おー!!」と声を揃えて返す。と――。
「ふははっ！　俺のことを忘れてもらっては困るな！」
「えっ？」
また驚いて見上げると、土手の上に来栖キャプテンが腰に手を当てて仁王立ちしていた。
「俺は来るなって言ったんだけどな……」

高浜君が至極残念そうな顔をする。
「私が来いって言ったんだよー」
栞が満面の笑みで言った。
「なんで!?」
「だってその方が面白そうじゃん。面白そうじゃない。面白そうなの？」
「なぜ私に聞く!?」
「面白そうなのかーっ!?」
キャプテンが叫びながら土手を駆け下りてくる。
「だからなんで私に聞くの!?」
「あはは」
「ふふふ」
「ははは」
「にやはははは」
と、みんなの楽しい声が、川原に広がる。
――そう。そして、たくさんの友達と喜び合って、笑い合える。
まあ、ちょっとばかりお節介なところもあったけれど、それはお互い様だよね。

だから、本当にありがとう、佳苗。

○　あとがき　○

初めましての人は初めまして。
お久しぶりの人はお久しぶりです。
作者の犬心（けんしん）です。
さあ、待ちに待ったあとがきです。
あとがき。
それは作者が思うままに、
もしくは自由に、
または好き勝手に、
あるいは奔放（ほんぽう）に、
そして野放図（のほうず）に胸中を吐露する場であり、
作者の欲望渦巻く無法地帯なのです。
作者の独壇場なのです。
それを覚悟の上でこの先をお読みいただきたい。
つまり何を言いたいかというと――。

「栞が好きだあああああああああああああああああああああっ!!」

……というか、

誰だ栞に告白とかしやがったバスケ部の武部君とかいうのは！　なに私に許可も取らずに栞とメアド交換なんてしてるんだ！　ケータイ爆破してやる！　栞は私の嫁だ！　異論は認めない！

はあはあ……。

おっと失礼。取り乱しました。

――え？　いや、私はロリコンじゃないですよ。本当ですって！　信じてください刑事さん！　別に彼女の容姿に惹(ひ)かれたとか、そういうんじゃ……あ、いや、決して彼女の容姿に魅力がないと言っているわけではなくてですね、むしろオッパ……。

……い、いえ、何でもないです。聞かなかったことにしてください。

さて、お察しの通り、書いている途中、栞視点での話を何度入れようと思ったことか分かりません。ただ、栞視点にしてしまうと、良くも悪くも語りすぎてしまいます。多くを語ってしまうと無粋(ぶすい)になる気がしてなりません。つまり、もし栞視点で多くを語ってしまうと、この物語の色々なモノが壊れていくと思ったのです。

なので、私は栞視点で書きたいという衝動と欲求を全力で押さえ込みました。

その衝動を押さえ込むために座禅を組んで瞑想したかったのですが、身体が硬くてちゃんと足が組めなかったので、代わりにベッドの上であぐらを掻きながら漫画を読みました。その欲求を押さえ込むために滝に打たれたかったのですが、近場に手頃な滝がなく、外も寒かったので、代わりに近所のスーパー銭湯に行って打たせ湯に当たってきました。

そのような数々の苦行を乗り越え、ついに私は一箇所も栞視点で書かずに物語りを完成させたのです！

あれ？　一箇所だけ栞視点のところがあったような――。などと思ったそこのあなたはなかなか鋭い！　と言いたいところですが、残念でした。あれはあくまで「栞の台詞」であり、「栞視点」ではありません。「栞視点」は一箇所もないのです。そうなのです。作者が書いているのだから、それは間違いないのです。諦めてください。

作者が「白いカラスが飛んでいる」と書けば、白いカラスが飛んでいるんです。それは間違いないのです。諦めてください。

懸命な皆様はもうお気づきですね。そうです。作者が「栞は私の嫁」と書いているのだから、栞は私の嫁なのです。それは間違いないのです。諦めてください。

それでは、最後までお読みいただき本当にありがとうございました。

――あ。あと、

朱莉のことも好きなので、朱莉も私が貰っていきます。あしからず。

２０１１年３月吉日

――この物語はフィクションです――